

かゝる土地の附物として、一つの誤つた観察がある。それは以上の如き思想の衝動は、一に時代の人の罪と見る観察である。決して時代の人の罪ではない。土地の罪である。土地に附いた病氣の罪である。日本の思想の衝動は、日本固有の風土病と見て差支はない。

かゝる風土病が、何うして日本の土地にあるかといへば、日本が、自然の土地を本位として、自己を發見し得ぬからである。日本の土地問題の徹底した解決は、この自然の土地の自己發見に歸着する。

土地を本位として、日本が自己發見の域に到らぬ例證は幾らもある。幕末當時、攘夷を主張し、開國を否認した、所謂討幕派は、討幕の目的を達した曉には、攘夷を棄て、開國に變じた。策といへば策だが、自己欺瞞の行爲である。

爾來薩長の取つた行動は、日本の國土を本位として、悉く自己破壊である。その自己破壊は自己欺瞞を本として發してをる。例へばその著しき例證として挙げらる

べき一つの事實は、日露戦争の結果である。

滿洲に露軍を迎へて、敵の東漸の勢を遮つたのは、一つは日本民族の血の保全にあつた。けれども、その保全を全うする道の完成のため、他の一つは、敵勢を一掃した跡に、日本民族の血の延長を行ふ行動に出るのは、當然の事柄である。閩族政治家は、血を以て押へた滿洲鐵道を、北米合衆國に賣り飛ばさうと計劃したのは事實である。自己の發見なく、唯形と物とに活きる閩族政治家の真相が窺はれる。

他の一つの事實は、加州の日本移民の結果である。

加州の日本移民は閩族政治家の金儲主義から來た一つの政策であつた。加州へ移民を出して、金を日本へ送らせる策である。貧乏世帯の出稼である。それは決して非難は出來ぬ。

けれども、その移民が問題となつて、終には日本の國土の上に、問題の範圍が及んで來るのは炳であらう。今日太平洋問題の叫ばれるのは、その問題に負ふ所が少



なくあるまい。太平洋問題は、自然に民族の血の問題化して行く。

金儲主義で、加州の土地を開墾して、尙その甘い汁を吸ふ積りの日本移民は、用がすんだら出て行けを米人から喰つてをる。日本の立場から之を見れば、恰度古代のギリシャとペルシャとの間の關係をつくりを取れる。

土地は直接、民族の血を扶植する最大必須要素である。その土地で地主だ小作だ、私有だ國有だ、家主だ借家人だ、など騒いでをれる間は、問題が何う轉ぼうが世話はない。

けれども、民族の血を本位としての土地問題となれば、何う轉んでも可いといふ譯には行かぬ。少なくとも自己を發見して、時を本位に、生命の自己延長を行ふことが、絶対に必要である。それなしには、縦令國土の神聖を叫び、神ながらの國に隨喜の涙を流したからとて、決して何の實もない。

## 第五章 日本民族の生活

### 第一節 二重生活

洋服に足駄、この形の上の二重生活は、肉眼には變に見えやう。併し日本社會の實際に徴してみれば、決して變ではない。それが却て實際に適應してをる。

あの市街の道路の田圃式な深泥は、ゴムや皮の靴よりかも、二本齒の足駄の方が遙に適してをるであらう。

又日本式の家屋は勿論だが、西洋式の建物まで、玄関から脱靴でなければ、内に通されぬ習慣では、よしや道路の泥の固まつた晴天の日でも、靴ならずも、日本式の履物に限る。

それから又、和服の上に二重マントを着た、田舎紳士の姿を見れば、足にはゴム靴か皮靴かを穿いてをる。一體この二重マントなるものは、一見して亡國の表徴と



取れる。よく晝や寫眞に見る西洋の萬引女が、この類のマントを着てをる。日本の所謂紳士なる風は、全く西洋の婦人式である。第一猿股からがさうであるが、袴も亦よく似てをる。

恐らく社會の性的中心といふ標準の一致の然らしむる所かも分らぬ。日本と西洋とは、萬事が形式上反對な對象で一致してをる。

日常生活の禮儀作法でも、日本は遠く離れて敬禮するのに、西洋では近くも近く抱き附いて接吻し、接吻せぬまでも握手する。

日本では疊の床の上に、親子も夫婦も雜魚寢する習慣が珍しくないのに、西洋では夫婦は一室、親子でも室を別け、雜魚寢の習慣は地を掃つてなく、寢るには寢臺式である。

かうしてみれば、日本式の生活と、西洋式の生活とは、表裏二面の形式が、正反對になつて、一致してをることを見出す。

西洋の女の猿股が日本の男に使はれ、日本の男の袴に似寄つたスカウトが西洋の女に使はれる。西洋では社會の表面で、公然接吻して珍らしくないのに、日本ではそんなことは活動寫眞か、西洋劇の新派物でなければ珍らしい。その癖、西洋では社會生活の裏面に於ける寢室の方面では、男女の雜魚寢は認められぬが、日本では綺麗にそれが認められてある。

日本現代の社會的二重生活は、見様に依れば、日本と西洋との相反した形式の一致と取れる。隨て形式の上の二重生活は、必要本位から割出して行けば、縱令日本に握手が行はれ、猿股が穿かれてゐても、何も問題として口にするには足らぬ。

民族生活の上から、二重生活の問題とされる大切な點は、その二重生活が、縱令形式上にしろ、自他何れを起點として起つてをるかの一點である。

例へば英人は、その國産を世界的市場に賣出す前に、自國の生活を本位として、その生活に適した品物を製出して、さうしてそれを世界の市場に出して來た。この



例は、産業を本位として見た自己延長である。之に對して日本の行方はといへば、縦令有名な昔の米澤織物の例でも、米澤藩の生活に適した品物ではなくて、金取主義に製出して、市場へ賣出したものである。今日の生絲にしても、日本で使つて、それを他國にも使はせる行方でなく、唯賣らん哉式の行方である。他を本位とした奴隸的氣分が、その行方を濃厚に支配してをる。自己延長氣分といふは、その内には味へぬ。昔の封建時代そのまゝの氣分が、産業方面にまで、このやうに見えるのである。

であるから、日本の二重生活は、他から奴隸的に支配されてをる性質の二重生活であることが推定されはせぬかと思ふ。勿論、この問題は、議論をすれば、立場々々で、自他標準の起點が異なるに相違あるまい。

けれども議論は、徹頭徹尾、議論の範圍を出ぬことは明である。實際に於て、自己を延長するとせぬとは、王陽明のいふ、知行一知、良心の働の外にはない。一口

にいへば、自己を發見して、その自己の働に依る、生命の自己延長が、生活に絶無の意義を與へる。その生活には、二重、若くは形式的重複があらうとも、そんな形式は問題とするには足らぬ。生命の自己延長の働は、經濟問題の範圍でないからである。

## 第二節 貴族的生活

試に汽車の切符を買ふ。白青赤の三階級がある。かうした三階級は、汽車が始まつて始まつたものでなく、汽車にも昔からの習慣を使用したまでに過ぎぬ。

又試に或温泉地に歩を入れる。すると或旅館は藝妓を入れるが、鳴物禁止で、十二時限り、若しそれ以上か或は鳴物が聞きたくば、旅館所屬の別荘を使用する。かやうな風に出来てをる。次の或旅館は、藝妓を入れ鳴物を禁じ、十二時過ぎでも藝妓を置く。但しこの旅館は一切間貸しをせぬ。凡てが旅籠である。



その次の或旅館では藝妓を入れ、鳴物を許し、さうして藝妓時間の制限もない。けれどもこの旅館は間貸しをする。さうして、木賃でもよければ、食事は簡易食堂で喰つても可い。かういふ式だ。

以上の三つの階級は、今日日本の社會生活を本位とした温泉地の旅館に見出せる。さうして、三つの階級は明かに、貴族風、成金風、平民風式を表徴してをる。一見して、貴族風は格が上で、宿料も亦高い。けれども、實際には、成金風の旅館の方が、格は下、宿料は多少安いやうでも、實際金がかゝる。平民風の旅館になれば萬事自由で、金をかけようとかけまいと勝手に出来る。

現在日本の社會に於ける三階級の生活様式は、この温泉場の旅館が好箇の代表のやうに見える。

日本で貴族生活の日常様式の表徴となるべき一つは仙臺平であらう。この仙臺平なるものは、以前は金華山と特に呼んだ生絲で織つた袴地で、その織物の特徴は、

孔雀の羽のやうに、シヤンと延びてゐたものだといふ。江戸時代の大名はこの織物の袴を得意としてゐた。仙臺平の貴族的なのはそれであつた。

今日ではその仙臺平が、會社組織で力織機にかゝつて、言はず資本主義の下に多量生産本位に製出されてゐる。

それでは仙臺平が昔の通りの貴族本位のものかといへば、それが多少説明附でなければ、エスともノーとも即答が出来ぬ。

仙臺平は貴族本位かといへば、さうであると答へる。ではそれは貴族階級の外には使用せぬかといへば、決してさうでないと答へる。一寸矛盾した答へであらう。ではあるが、實際、會社では上中下三階級、汽車でいへば白青赤式に、差別して織物を製出してをる。でなければ、會社が立ち行かぬ。量に於ては赤の需用が一番多いのである。

さらば何うして仙臺平が貴族本位といへるかといへば、平民でも社會生活の標準



は、貴族にあるからだ。

それでは白青赤式に仙臺平の實質的な相違はといへば、それは絲質、合せ方、撚の掛け方、かういふ點に主としてある。貴族はシャンとしたのを求め、成金はテレリとしたのを使ひ、以下百姓町人職工階級は柄本位で、親父も子供も、葬式にも嫁取りにも、共用共通であるといふ。儀式といふのは、平民本位でなくて、全く貴族本位である。

日本は太平三百年の徳川幕府の下に、全くの儀式國化した。それで萬事が貴族生活本位である。生活様式の根本標準は、靜的に求められて、茶の湯、活花、坐作進退、靜肅溫雅が主とされてある。

若しその靜的生活様式を、そのまゝ取つて考ふれば、日本民族の生活を死滅に導く道だとしか取れぬ。併しながら、その生活様式は、單なる形式の一面である。一口にいへば、動的生活の時を無視した靜的方面の一面に止まるのである。

實際自然の活動體には、靜止状態は絶対にあり得ない。けれども、相對的に物の位置を、單に形式的に見るときは、活動體そのものに、靜止状態が成立つてをる。その靜止状態は、一つの完全なる組織體の活動に、絶対必要條件である。

徳川幕府三百年の太平に、靜的方面の生活様式を獎勵して、一般社會を動中靜の相互結合の状態に導かうとしたのは、確に一面の道理に適つた行方であつた。

けれども、人間の無自覺と、社會そのもの、自己發見の缺乏とが、その行方を單に形と物とに囚へさせたのは、餘儀ない事柄である。

この意味に於て、日本の貴族生活は、民族の生活を本位として、必ずしも無用の長物視することは出来ぬ。けれども、その貴族的生活あるがために、日本社會の形式本位な自己破壊の行爲は一段力附けられるものと見做さねばならぬ。

### 第三節 成金生活



現代日本の社會では、物質的に最も活動を示す階級は成金階級である。活社會の波に乗つて浮きつ沈みつする階級は、金を本位に働く階級である。

玉の不夜城に夜を徹して、一六勝負に萬金の遣取りするのは、この階級の外にはない。若し他に何者かそれに類した階級があるならば、それは暗夜に扉を破る黒面の強盜の外にはない。

成金階級は社會に活氣を添へる。彼等なしには社會に景氣なるものは附かぬ。景氣が好ければ一般赤切符階級までもが、俄に景氣附いて来て、青切符も買へば、玉の不夜城の窓にも寄る。

尤も社會の景氣といふのは、空中の氣壓、若くは洋上の波濤のやうで、決して好景氣のみが、何時も絶えずに續きはせぬ。高氣壓と低氣壓、波ならば浮沈、さうした風に狂がある。その狂は自然の順序、定まりきつた事柄だ。

所が不景氣に襲はるれば、成金は頭が曇らず、赤切符階級は、青から急に赤に變

つて、騒ぎ出す。かくして社會を好景氣の陽氣な活動状態から、不景氣の陰氣なそれへ向け變へる。皆之れ成金階級の思惑、乃至は周圍の變化に適應する能力の缺乏に依るのである。

今の日本の状態では、成金階級は鰐を追ふ鯨の如く、又普通の勞働者階級は、鯨に附く鯉の如き風がある。目的物は鰐にある。

所が成金階級は、勞働者階級が、自分等の威に依つて、生活の道を辿つてをるやうに取る。安んぞ知らん。勞働者階級は、成金階級を目して、山の者か海の者か、分らぬ者が自分等の餌を荒し廻るやうにしか取らぬ。鯨さへをらねば、海には餌は豊富に見出され、不景氣などいふ惧もなくてすむ、鯉の群同様に、社會の所謂生産勞働者階級は、失業無職に成金階級を恨むであらう。

物質的に社會の分化を促す成金階級は、少なくとも社會から見て、自己破壊の先達の觀がある。景氣が好ければ事業熱に煽られて、まるで社會を戰場化する。



成金階級に屬する人間は、平和的戰國の群雄である。切取御免。切棄御免。土地や、物資や、株券や、手形や、金の遺取は、朝飯前で、人の命さへ屁とも思はぬ。眞に戰國時代の群雄が、血に渴して、猛獸の心理化するやうに、現代の成金階級も亦、等しく血に渴して野獸化する。

戰國時代には家庭は全く無視されてゐた。女は一つの道具の如く、芝居で見ると、無用の口など開かれはしなかつた。今の成金階級の家庭が多くさうである。さうして女は全く道具で、側に侍べる紅粉の美妓は、悉く頭の無い、無用の口は絶對にきかぬお人形式である。

何うしてこれらの成金階級に屬する人間が、社會を本位として、活動の中心でありながら、社會的に自己破壊の先達であるかといへば、形と物とに囚はれて、終には自己を失ふてしまうからである。

先づ試に彼等の身に纏ふ着物、その他の所持品を見れば分る。金に飽かして、美

をつくし、贅をつくしてをる。さうしてその側のお人形といへば、これまた美を凝らし、金に飽かしてをる。

玉の不夜城に、かくして何ものか同席の話對手を餌として、一攫萬金を夢みる譯である。好夢か芳夢か。その樂しかるべき夢の間に、彼等の家庭の内はといへば、母の眞情を涙に漏らして、可憐の兒を抱く夫人がある。その夫人の心中には、昔苦しい自分の手鍋、若くは夫の腰辨時代が描き出されて、その時代の境遇が追慕される。夫人は返らぬ昔の快夢に、今の悲哀の夢を較べて、等しく涙の玉の不夜城に夢みてをる。

けれども、眞に社會の構成を考察すれば、この成金階級の社會的自己破壊の内に破壊すべからざる眞如の玉の人間自然の愛の至情が湧いてをる。それは愛兒を抱いて涙に眞情を漏らす母の力である。

この見るべからざる、而かも破るべからざる、兒に對する母の愛は、血を守り、



生命の自己延長を行ふ唯一の尊い力である。神とは蓋しこの力をいふのであらう。成金階級の社會に於ける活動は、蓋し彼等の社會的自己破壊の行動が、最も貴重視されるに相違ない。彼等が國家のために金を儲けて富を増し、社會のため生産を刺戟して、多くの労働者階級の生活を助け、以て一般社會の幸福を増すといへどもそれは形と物とに囚はれた夢同様、時を本位に考ふれば、全然空に歸してしまふ。

#### 第四節 民衆生活

よく見る、水鳥の波に任かせて、浮きつゝ憂を知らぬ姿が、まるで今日の金に活きる民衆生活である。

水鳥が何物かを求むる如く、民衆も亦何物かを求むる。水鳥は水にさへありついでをれば、浮きつゝ憂はないやうに、民衆は金にさへありついでに行けば、社會の波に揺られつゝも、生活には憂はない。

けれども、我も人なり、彼も人なり、美しい着物に身を纏ふ一人の婦人が、多くのその日稼の職業婦人の目を奪へば、職業婦人は考へる。

女の腕一本で、何うしてあんなに美服が身に纏へやう。一本の腕では、今の社會の實狀では、僅か下宿に住んで、口を糊すが關の山だ。

かう考へ込んで來る職業婦人は、人には自然が平等に恵んだ武器あることを考へる。我も人なり、彼も人なり。自然の平等が、かうして社會的に那邊に馳するか、想像に値するであらう。

昔は浮き川竹の名があつたが、今は自由な楽しい川竹の實がある。女を本位とした、社會的民衆生活には、かやうな一面の世界が見出せる。

この世界は何れ位な廣さの世界か想像を許さぬ。されども日本の如き人口増加の國情で、金にありつく機會が漸次に少なくなれば、自由な楽しい川竹の世界は、女のために自然膨脹せぬとはいひ得ぬ。



従來の人の頭は、限られた空間本位に出來てゐた。それは實際、時を本位とした人間自然の世界からいへば、愚の骨頂の迷夢に過ぎないのだ。實際の世界は時を本位に考ふれば、明かに自然膨脹して行く性質を有つ。

その世界を股にかけて、民衆的に社會の女が、自由な楽しい川竹の生活を求むるならば、従來の社會組織は根本から破壊されるに定まつてゐる。若しさうなつた曉には、夫の留守に孤閨を守つて、愛兒を抱いて、至情の涙に胸を焦す夫人は社會に影を消さう。

けれども尙ほ依然として、社會に成金は存在する。併し果して貴族が存生するか何うかは疑問である。成金は依然として社會的自己破壊の先驅であらう。さうしてそれらの成金對手に、自然の武器を利用して、我も人なり、彼も人なりを發揮する職業婦人が、その社會的自己破壊に油を注いで勢を附けるは必然といひ得る。

さらば社會の民衆中の男は何うであらうか。彼等は目に高閣を見て、顧みて借家

を見れば、等しく我も人なり、彼も人なりと考へるであらう。さうしてその考は何所へ彼等を導くかといへば、彼等が男として恵まれた自然の武器へ行くであらう。男の恵まれた自然の武器は何かといへば、言ふまでもなく、力である。

その力は平素、所謂平和戰國状態にありては、資力の下に勢力として活動する。さうして生産方面の一方の働をなす。

併しながら、他の一面に於て、社會的階級闘争の一勢力として、この民衆的男の自然の武器は、大なる社會的自己破壊の働をなすのである。

最近日本にも、諸種の名に於て、民衆的政黨組織が成立つた。これらの政黨は、明かに日本の新たな社會的自己破壊の勢力である。

若し國家が、その生命とする統一力を失はず、眞に日本をして民族的に自己を發見せしめ、その途中に於て、自己を消滅せしむる患なからしむるには、國家として如何なる勢力に對しても、取るべき道は絶對であらねばならぬ。民族の生活を本位



として、國家の取るべき道はそれである。

さりながら、民衆の男が、社會的自己破壊に對する行動こそ、眞に健全なる民族的自己發見の道であることを忘れてはならぬ。

民衆の女が利用する自然の武器の性質と、民衆の男が利用する自然の武器の性質とは、明かに陰陽の差あるばかりではない。

女の武器は、成金階級の物が目的の標準である間に、男の武器は、社會組織そのもの、構成が目的の標準である。根本から性質が違ふ。若し政府の官憲が、國家の基礎を守り、民族生活の安定を計るならば、陰險なる女の武器の利用の道に、嚴密なる法網を張ることを怠つてはなるまい。

### 第五節 デモクラシー

日本社會の生活様式は、一般に貴族本位である。農夫も町人も職工も、仙臺平の

袴を持たねば、社會生活が普通に出來ぬとされてある。それを見て日本社會の生活様式は明瞭に分る。

それでは日本社會には、デモクラシーはないかといへば、世界到る所、デモクラシーは自然に存在する。平等生活は恐らく神意の理想であらう。さうしてそれは、人間自然の本能に宿る、尊い神の心であらう。

試に幼児が指に怪我した場合を想像せよ。幼児は病院に送られて、その指を繃帯して貰ふ。その繃帯が幼児のためには、心を痛める本となる。それで幼児は泣き叫ぶ。病院のお醫者は幼児に對つて、お宅に歸つてバ、チャンに解いてお貰いと言ひ聞かせて、その場を通れる。

幼児は家に歸つて父にその指を示して泣く。父は病院の話聞いて考へる。けれども醫師の言葉の通りには出來ぬ。それで我が子を欺く。それは爲すに忍びざる心を以て爲すのである。所謂正しき動機に依る不正を敢てするのである。何うするか



といへば、幼児の繙帯してをる指と一様に、自分の指を繙帯して、バ、もバ、もど幼児に示す。不思議にも幼児はそれで泣き止んで、指の繙帯を忘れてしまったかの観がある。

この幼児の態度そのものは、明かに平等意識の本能の働と取ることが出来やう。人間自然の本能に宿る神の心の外、幼児の態度を、何者が説明し得るであらうか。人間には自然にかゝる平等觀念の尊い力が宿つてをる。さうしてその力は、人間一生を通じて不變のものであり得るであらう。

併しながら、人間は環境の支配を受けて、その内心の自由なる尊い意識を硬化させてしまう惧がないとはいひ得ぬ。殊に專制的な社會の空氣の中に育つて行く中には自然の自由な本能の靈質は悉く失はれてしまう惧が多いのである。

さうして、その硬化して失はれたる、自然の自由な平等意識の尊い力は、如何になり行くであらうかといへば、我も人なり、彼も人なりに變化して行く。等しく平

等意識である。

けれども、自由な態度の平等意識の働と、專制的に硬化された平等意識の働とは決して同一の結果は生せぬであらう。

かの幼児の平等意識の如きは、眞に誰の心にも神の働かの如く取れるであらう。それに對して、我も人なり、彼も人なりを發揮する、職業婦人の平等意識は、最早神の働を離れて、眞に一種の惡魔、下道の働としか取れぬであらう。況や自然の男子が、力に訴へ、社會の階級的鬭争意識を挑發して、掠奪的直接行動を敢てするに於ては尙更のことである。

尤も、民衆の頭からいへば、今日の社會に上流の階級を占むる人間は、以前一度は自然の男子の武器に依つて、切取掠奪したものゝ血統である。汝に出でたるものは、汝に返るが自然の道だ。機會あらば、その自然の道に彼等が出遇ふは明白であらう。かう見る。



怖るべきは民衆の群集的心理である。一旦社會の秩序が亂るれば、所謂社會的洪水の勢を以て、何所から破壊の手が及ぶか知れぬ。かゝる場合は社會に一人の敵なしと信するものも、或は誤解に依つて災を受くる場合のないともいひ得ぬ。

若し匿れたる極めて少數の敵でも平素持つものゝある場合は、その匿れたる少數が、群集心理を利用して、平素の恨を晴らす行爲は怖るべきものがある。一人の突嗟の言が、怒濤の如き勢を激成さすに足るのである。

かゝる行動は、社會のために、極めて忌むべき不祥事である。さうしてその行動それ自身、社會的自己破壊たるは争へぬ。

所が、かゝる不祥事の起る毎に、國家の軍隊若くは政府の警官隊の出勤を見る。其結果は一層烈しい社會的自己破壊を演ずるに至る。不祥事の上の不祥事である。

かくして若し幸に、社會が自己を發見する機會が早めらるれば、多くの犠牲も左まで憂とするには足らぬとしても、自己發見の機會は愚、自己消滅の機を早める愚

を演せぬとは保障し難いのである。民衆生活を本位としての社會的自己破壊は、男にしても、或は女にしても、民族として大なる注意を要する。

## 第六節 階級闘争

日本民族の社會が階級的闘争の幕を開いたは幕末である。幕府の階級的社會生活は、單に士農工商の四階級に止まらず、一家の内の長男次男三男にまで及んだ。

「伊井大老の死」を仕込んだ劇作に、大老が町家の三男から家督相續の分配請願の賄賂を贈られて、さて自分も今頃まで十三男の冷飯でゐたならばと、天下の志士浪人なるものゝ境遇を察し、徳川幕府の階級制度の根本を抜くより外に、日本を救ふ道なきことに悟り及ぼさせてをる。日本の階級闘争意識は、之が初幕であつたことが分る。

その以前、日本が演じた藤原氏以來の社會的闘争は閥族的闘争である。源平の戦



でも、北條足利兩氏族のそれでも、武田上杉の争でも、織田豊臣徳川時代の軍でも、皆平面的な氏族間の闘争意識に支配されてをる。一種の野獸的闘争の遺傳の觀がある。

幕末の闘争は、表面、徳川氏と外様藩との閥族的闘争の色彩は十二分認められる。けれども亦階級闘争の立體的色彩が、より以上濃厚であることを度外視することは出来ぬ。

閥族的闘争意識は、本能的に、彼も獸なり、我も獸なり式かゝつてをる。社會生活程度の低級な野蠻時代の現象である。

階級的闘争意識は、理性的に、我も人なり、彼も人なり式である。けれども、その闘争そのものゝ意識に至つては、閥族闘争と五十歩百歩である。喩えていへば、冠被つた猿同士の合戦と、被らぬ猿同士のそれとの差に過ぎぬ。

近來日本にも、階級的闘争意識といふ聲が表面に聞えて來た。その聲は確に西洋

のエコーと取れる。けれども日本社會には、己に幕末から社會に階級的闘争意識は撞頭してゐた。さうして明治維新も、その實は、その意識を四民平等化して、民族の大勢を動かしたのであつた。

今日所謂労働者の階級的闘争意識なるものは、事實西洋のそのエコーであるのは争へぬにしても、根本に日本社會に、まだ幕府時代の階級的闘争意識の延長のあつるのは確な事實だ。

一般に日本社會の下層階級は、労働者に限らず、その胸底に「俺だつて人間だ、馬鹿しやがるな」、この文句の正體を守つてをる。危険な正體である。

さらばこの危険な正體を、何うして日本社會に發生させて來たのかといへば、それは全く野獸的闘争意識に支配された、戦國時代からの、征服者被征服者間に行はれた、專制的統一である。

その專制的統一は明治政府も亦幕府の延長として踏襲して來た。現代昭和の今日



に至るまで、その精神は官場に伏在してをる。之が日本社會の邪道の本である。その祟は深く社會の有ゆる部分に浸潤してをる。治者被治者の差別を超越し、上層下層の區別なく、社會一般に、言はゞ梅毒の第三期症状ともいひ得る位、痼疾的に喰込んである。

日本社會を內的に腐敗破壊させる懼のあるのは、この危険な階級的鬭争意識の正體である。「俺だつて人間だ」、之が一度導火線を求むれば、忽ち爆發して常識も理性も失はれる。さうして、口には俺だつて人間である、其人間が野獸化してしまふのである。日本社會の工場内の職工騒ぎの本はといへば、大抵之から起つてをる。一口にいへば、日本の社會的生活には、人間味が缺けてをる。人間味は、人間個個の心の内に、自己を發見して初めて完全に備はるには相違ない。けれども多少なりとも、それを備へて、野獸化せぬ位の程度に漕ぎ附けたいものである。

要するに、他に求めて、その人間味は、得られる性質のものでない。自己の一身

から發生せねばならぬものである。

さらば、何うしてそれを發生さすかといへば、それは極めて簡単な事柄である。本々人間には凡てにその人間味の本はある。幼兒の性に己に神性の備はることを察して分る。所がその人間の神性が、野獸の行爲に壓迫されて、自由を失ふて硬化されてしまふ。そこに故障があるのである。それで、その故障を取除きさへすれば、人間は神性を心に活かして、一身の主を守ることが出来る。人間味は期せずして社會生活の中に生じて來る。

尤も世の至難な事柄は簡單そのものである。天才は簡單の親である。人間味を發生さす道は、極めて簡單とはいふものゝ、天才を俟たねば出來ぬ事柄かも知れぬ。

兎に角、方法は單に失はれたる自由を回復する一途である。自由を奪はれてをるために、神性は硬化されて人間の心の働は失はれてをる。野獸化する所以である。日本が、社會生活を標準として、歐洲の最も進んだ社會に較べて、二千年以上遅れ



てをると、小泉八雲の神國にあるのも、之がためであらう。

社會的階級は、一面に於て、その存在の必要が絶対に認められる。社會に階級的闘争の起るのは、階級あるがためと取るのは正當な見解ではない。人間に野獸の性を帯び、神性を失ふためである。その根本は、專制的統一の下に、人間の自由を硬化さすからである。

人體には頭手足の別がある。けれども人體たるに於て一つである。けれども、見様に依つては階級的に取れる。階級の存在は一人の體にもある。併しながら、その階級は單に形骸に止まつて、その内容の生命を本位とし、その生命の本體たる血を標準と取る場合は、一體同血、何の階級の差別もない。社會組織を形造る民族の生活は、人間を形骸としては取扱はぬ。個々の自覺はこの點に歸着する。

## 第七節 政黨

立憲政治には政黨は附物だといふ。政黨は確に立憲政府の脚である。それは單脚多脚いろいろある。立憲政府の脚は理想として双脚である。人間を本位とした理想に本づくことが分る。

その政黨を遺傳的に視るならば、征服者被征服者の強弱關係から來た、專制統一の反動たる階級的闘争意識の産である。

その最も盛なる國は、世界上でも英國である。英國は傳統的な保守自由兩黨の外に、勞働黨がある。さうして三黨、社會の表面に政見を標榜して、鎬を削つて戦を交へる。武器は主として口である。けれどもその口は舌を使つて、牙は使はぬ。野獸の遺傳を、單に形式に留めて、實際には留めぬ。大なる人間社會の進化と取れる。

英人のこの社會的進化の中心には、人間の血に潜む神性維持の精神が宿る。さうしてこの精神は一身の主となりて、自己を統一する絶對な力となる。この主は神聖にして他から犯されもせねば、又この主を自から犯す意思はない。英人が社會生活



に個人的自治觀念を貢ぐのは、この一身の主の自覺に依つて行はれてをる。

立憲政治は自治政治である。その自治は國家を本位としての自治でなく、社會を本位としての自治である。自治には勿論、國家本位と社會本位との二様ある。國際的には前者を重んじ、國內的には後者を重んずる。立憲とは國際的ではない。それは絶對に國內的である。隨て立憲政治の自治といへば、天降式では意義をなさぬ。

この意味から考へて見れば、政黨なるものは、個人的自治觀念を基礎として、初めて意義が認められる。社會を本位として初めて政黨成立の意義がある。

日本にはまだ、政黨の中に、國家主義を夢みてをる種類がないとはいひ得ぬ。昔の源平、足利織田の亞流である。閥族の筋を引いた、似て非なる政黨者流の行動である。

國家主義は、その本體から推して、國民全體として、他に對して、取るべき性質の主義である。國內にそれを取るのは大なる誤である。若しそれを取る必要がある

場合は、絶對に國家は政黨を否認する必要がある。國家主義は、一國民を標準として、絶對統一を意味するからである。その場合に若し尙ほ國家が立憲政治に依るならば、政黨は單一政黨で、一脚の上に政府を支へねばならぬ。國家非常の場合に於て取らるべき現象である。

若し日本にムソリニを出すならば、彼は政黨を國家主義で導くであらう。ムソリニは非常の場合のマキアヴェリである。日本にムソリニの必要あるか何うかは別として、政黨の中に國家主義を夢み、マキアヴェリ式に歩を運んでをる種類のあるのは、確な事實である。恐らくそこに、日本社會の内情の現實曝露があるのであらう。社會進化の一產物として、政黨を見る場合には、角も牙もない、野獸の群のやうに取れる。さうして、社會進化の半面に必ず付き纏ふ、退化的一遺物とも、現代の政黨は取れるやうである。政權争奪の踏臺として、少數の有力なる野心家が、群羊に虎皮を被せて、選舉戰場を駆廻る有様は、まるで一種のドンキホーテ式に取れ



る。

實際日本の國會議事堂と銘打つた堂々たる議場を覗けば、まるで印袴纏の人足の雛壇式である。よく見ればフロック姿で、その襟の前に、白字で黒地に位牌のやうな標札がある。その白字とフロックは好く釣合つて、まるで土方の印袴纏そっくりである。

或は怒號、或は軒聲、さながら野獸か海獸かの群どしか想像されぬ。まるで賑かな動物園そっくりである。この點から日本の堂々たる議會は二度見る氣がする。

若し之が眞に國民の代表で、日本社會の現實の表徴だと假定すれば、國民の賊として議會を包圍し、議員を捕縛した、昔の英國のオリヴァ・クロムエルの神軍の行動が偲ばれる。

日本政黨の現状は、日本社會の自己破壊といふよりは、寧ろ自己破壊の粕のやうに取れる。言はゞ恰度洋行前に日本で造つたフロック・コートが、洋行後に持て餘

されてをるやうな工合である。何とか處分の道が早晚附けられねばならぬ。

その政黨の中に、實業家を標榜した一團と、労働者を標榜して一團とが、政黨を組織して這入つて來た。日本の立憲政府は、まるで章魚のやうに脚が増して來る。二本脚の人間の理想は失せて、三本脚のコックリさん、四本脚の乗馬、はては多脚の章魚の理想に化して行く。日本の政黨は、いよくその正體が海のものか、陸のものか、譯の分らぬ物に化する。その化物の最後の始末は、國民の神軍に俟つより外に道はあるまい。

## 第八節 國民的神軍

民族的生活の安全なる基礎は、民族的血の中心を、安全に擁護するにあることは争へぬ。國家の主權を、その血の中心に一致さす、日本民族の行方は、民族的生活の理想として、合理的と言はねばならぬ。



けれども、この理想を實現する永遠の道として、國民の守るべき最大必要條件は内に國民的神軍の存在すべき一事である。

國家は、その主權を絶對として、國際的に國民の保護に當り、同時に、國內的に社會秩序の維持に當る。その國家の絶對は、絶對の絶對でなく、内外共に、相對の絶對である。

隨て、國內を本位として考へる場合には、國家の絶對主權を擁護するために、社會に絶對の力を要する。その絶對の力が、即ち國民的神軍である。

國家は軍隊を持つ。軍隊なき國家は國家の實を持たぬ。國家は自主の主體であるからである。神聖にして犯されざる絶對必要條件として、國家は自衛のための軍隊を持つ。その軍隊は國家の手足爪牙であることは明瞭な事柄である。

國民的神軍は、國家の手足爪牙ではない。若し不幸にして國家の存在が消滅する場合あらば、神軍は起つて、再び國家を創造すべき力を有つ。

又若し不幸にして、國家が不逞の少數特權階級若くは惡辣なる政黨者流のため、その本來の基礎を誤らるゝが如き場合あらば、國民的神軍は、起つて國家を、その周圍の毒牙<sup>や</sup>を救はねばならぬ。

國民的神軍は社會にありて、國家の主權と常に絶對の相對を守らねばならぬ。でなければ、國家主權の絶對的神聖を維持することは不可能である。

國民的神軍の本體は何であるかといへば、それは社會の個人の守る、一身の主である。この一身の主なしには國民的神軍の本體はない。隨て、國民的神軍の主體の實在は、國民個々の心にある、といはねばならぬ。自己を見出して初めて神軍の本體は意義を有つ。

日本には古來神軍はない。日本には國民的自主精神が發生の期を有ち得なかつたからである。日本は七百年來、專制統一の下に、個人の自由を滅却して、自主精神なる觀念を、個人に發生させなかつた。



明治維新後、自主觀念が發生して、社會に新たな個人思想が芽を出して來た。けれども日本は、國民として、まだく國際的に、自主の立場を守るに足るべき力がなかつた。

國民的自由なくして、個人的自由のあり得べき道理のあらう筈はない。隨て一方から見る場合は、日本は縱令社會的に個人の自由を滅却しても、國家的に國民の自由を獲得せねばならぬ必要があつた。明治二十七八年及び同三十七八年、國民の運命を賭して、國家が日本の自主權を發揮したのは、この必要からであつた。

その國家を擁護して、日本國民の自主權を、國家的に發揮せしめ、國家の手足爪牙をして、神軍の勢あらしめたのは、一に社會に絶對な神軍の力があつたためである。

かくの如く、國家と社會とが一致して、國民の安危に向ふ場合は、恰かも政府は一個の踏臺に支へられたかのやうに、何の後顧の憂なく、國家の使命に突進するこ

とが出来る。

併しながら、國家と社會とが、國內に於て對立する場合には、國家は自己の絶對統一を偏守し、社會は又自己の絶對自主を固守せんとして、互に相容れぬ現象を來たす。明治維新後、解放された日本社會の内部には、隱然その傾向が發生しつつあるのである。

一般に神軍は、個人の絶對な正當防禦の力として、自然の賦與する權利である。隨て神軍の本質は、社會的正義の力そのものであらねばならぬ。恰も個人に神性が潜み、自然に自主精神の本が惠まれてあるやうに、神軍の力も亦社會に惠まれてある。要は社會が、その社會的正義を、國民的立場に於て、國家主權の絶對と、相對的に擁護し得るか否かに依るのである。

日本は、國家と社會とが、現在明かに二途に岐れて進まんとする傾向がある。民族の立場から見れば、その傾向は喜ぶべき事柄ではない。假に、その二途が、舊來



の閥族的闘争の平面的觀念に支配されると假定すれば、國家と社會との分離、民族生活の破壊、國內の紛亂は、避けんとして避くる途はない。若し又假に、階級的闘争の立體的觀念に支配され、國家と社會とを、國民的利害本位の二大政黨と假定するならば、共に絶對を理想として、龍虎相戦ふ結果に陥るであらう。

日本の民族的生活は、この意味に於て、重大な危機に迫つてをる。この危機は、明かに日本社會の自己破壊の結果として、一度は遭遇せねばならぬ日本の運命である。この危機を安全に通過するには、何が日本に必要なかといへば、それは一に國民的軍の實在である。

### 第九節 共產主義

日露戦争で、國家の手足の輕重を知られた露西亞は、再び歐洲大戰でその爪牙の眞價を曝露した。露西亞民族生活の立場から見れば、國家の鼎の輕重は分り切つて

をる。さうして、その不安も亦、甚だしいものがあつた譯である。

露西亞ならずとも、國家擁護の必要上、神軍の蹶起は當然の事柄であつた。その露西亞が新たなる國家建設の主義として、共產主義を標榜した。列國は之を目して惡魔の降來の如く驚いた。併しながら、その惡魔は、天より降來せるものにはあらで、列國各自の内面より發した、怖るべき惡魔の反映に過ぎぬのであつたことを、何所でも人は知らなかつたやうである。

兎に角、列國に對しては、露西亞の共產主義は、怖ろしい性質の惡魔であつた。それは恰度強盜が、自分の惡事の内容を、天魔鏡に映されて、見せ附けられるやうなものであつた。地獄の惡魔は怖ろしいといふが、その實、佛の教では、怖ろしがる人間の、心の裏だと言つてをる。その通りに違ひない。

露西亞は地獄であつた。その地獄には、ルーブルといふ紙幣があつた。その紙幣は、露西亞に私有財産制度が、國家の力で維持されてあつた間は、人民の生命と天



秤に掛けられてゐたほど權威があつた。

所が後では、そのルーブル紙幣は、屑紙同様に見做されて、生命どころか、髪の毛一本とも、天秤にかゝる値打は認められなくなつた。

この露西亞のルーブルの實例から見れば、私有財産制度の下に、國家の力で保證されてゐた、社會の資本なるものは、明かに國家主權に對する社會の普遍的信用であることが證明されやう。

さらば、その資本が、絶対に國家の力で、個人的に私有し得らるゝ場合には、國家の主權並に社會の普遍的信用が、又絶対に個人的に私有し得らるゝことを、否定する譯には行くまい。

絶対の絶対、若くは非立憲を肯定せざる限り、かゝる社會の現象は、成立し得ざる道理であらう。

若し社會にかゝる現象が成立し得るとするならば、ルーブル紙幣を以て、絶対な

個人主義の私有財産制度の下に、資本主義の社會組織を構成してゐた以前の露西亞は、明かに人民の血を、紙幣の道具で搾取してゐたことは争へぬ事實であらう。露西亞の地獄たりし證據はそれである。

元來露西亞の以前の國家主權者は、個人の立場に於て世界無比の財産を私有してゐたといふ。驚くべき事柄である。露西亞では以前明かに、國家主權と社會的普遍的信用とが、個人の立場の主權者に、私されてゐたことを確知するに難くはない。かう考へれば、露西亞が革命後、共産主義を標榜したのは、以前の暗黒に代へて光明を發表した行方である。その行方は、幕府を倒した日本の薩長が、王政復古、四民平等を標榜した行方である。双方以前の反對を示す。それが革命の順序であり且つ常道である。自然も夜に次ぐに晝を以てする。

唯こゝに一つの滑稽と見做さるゝ事柄は、世界の列強が、露西亞の共産主義の宣傳に戰慄した一事である。露西亞の立場からいへば、革命の最中は外部からの襲來



が怖ろしい。クロムエルの革命當時でも、外部に對して警戒を加へ、國內に革命の神軍を動かさしつゝ、國外に國家の手足爪牙の軍隊を動かしてゐた。

露西亞にはクロムエルの神軍はあつたにしても、外敵と戦ふ國家の軍隊はなかつたであらう。露西亞の苦心は察するに足るものがある。けれども露西亞には、軍隊以上、外敵に對する武器があつた。それは共產主義の鬼面である。

如何に當時の列強は、露西亞の共產主義に戦慄したか、その狼狽は全く一種の喜劇であつた。露西亞の鬼面に怖れた列強は、露西亞のために、其怖ろしさを宣傳してやつた。日本の如きは、兵隊を露軍に接せさせることさへ、怖れてゐたのである。

共產主義の本體は、本當をいへば、紙幣の上に越すものは、絶対にないのである。紙幣は國家の絶対主權と、社會の普遍的信用との調和的働に依る、一種の信用手形である。その事實が紙幣の何物たるかを裏書してゐる。

若し眞に共產主義を天魔として怖れる國民があるならば、須らく自國の國土から

紙幣を一日も早く驅逐せねばならぬ理である。幸にして共產主義に對する恐怖は、列強間の一種の喜劇であつたのが、己を知らぬ愚者の一得であつたのである。

日本は、民族生活を基調として、國家主權と社會の普遍的信用とを、神軍の力にかけても、完全に維持することを忘れてはならぬ。かくして初めて共產主義の鬼面に怖るゝ憂は、日本民族から絶対に取除かれる。

## 第十節 個人主義

共產主義と對象的に個人主義といふ言葉がある。さうして事實日本の普通社會の人々は、共產主義といへば、惡魔のやうに毛嫌ひして、個人主義といへば、平氣で面かも蜜でも嘗めるやうな氣分でゐる。

共產主義といへば、讀んで字の如くであるが、その字は徹頭徹尾形式である。凡て主義は働に伴ふて活きる。働は形式でなく、活きた力が時の環境に延長して行く



ことである。文字や主義は時に對しては消え失せやう。

共産の産は、財産の産に取れば、財産家には共産主義は怖ろしい。又その産の字を、出産の産にでも取らうものならば、それこそ社會道德の破壊としても、妻帯者の脅威としても共産主義は怖ろしい。

併しながら、若しその産の字が、生産の産であるならば、何人にも左まで共産主義は怖ろしくはない筈だ。

尤もその場合には、唯個人主義を絶対崇拜の的としてをる人々丈けに、共産主義が厭かられる。その場合の共産主義は、共勢主義化すからである。個人主義の崇拜者は共勢は大々的に嫌ひである。

個人主義者はかういふ。人間が一緒に仕事をせうものならば、誰も力を出して働くものはない。銘々自分の利益のためと思ふから、力一杯働くのである。他人のための利益と思ふて、誰がさう力一杯出して働かう。

立場と考へ方との取りやうで、個人主義者のかゝる言は發せられる。立場といふは、形式的な自他の立場だ。例へば親と子といふ立場のやうな形式である。又考へ方といふは、損得の考へ方をいふ。

個人主義の極端な崇拜者は親子とも共に働くことをせぬ。親の働は親の働、子の働は子の働と、チャンと區別を立てる。所がその人間は、自身子であつた時代の働と、親となつた時代の働とを、區別してをるかといへば、區別してをらぬ。個人主義者の特性として、馬車馬的に一生同じ軌道を駈ける。

それ故に個人主義者は、時を標準として考へれば、言ふことに矛盾がある。彼等の世界は物と形との世界に限られてあるからである。個人主義の立場から來る誤謬は之だ。

又個人主義の崇拜者は、自分の益する所得の出所は何所であるのか、それを十分辨へぬ。自分自身働けば、自分の懐に多くの金が舞ひ込んで來る。その金は一體何



が造つて何所から來るのか、個人主義者の頭には、それは少しも考へられぬ。彼はその金を自分一人で造り出すかの頭である。

金は國家の主權と社會の普通の信用とで造り出せる。さうしてその金は社會の共同努力の外に出所はない。その大きな金の泉が、何うして一人や二人の力で出來やう。働く社會の銘々は、皆自分のため、多くの人のために働く。それ故に國富増進を本位とすれば、一國の富は社會個人の富となり、一國の幸福は社會個人の幸福となる。全は個のため、個は全のためたる標語が、自然に社會に生れ出る所以である。個人主義者の考へ方は、自分の金は自分の金だ。その金が國家並に社會を利用するといふ方へ馳する。所がその金が國家を害し、社會を亂す根本原因となる場合が多いのである。

例へば強慾の高利貸がをる。その高利貸から借金した家がある。都合が悪く元利の支拂が出來ぬ。利が元へ加はる。次第に期限が切れる。すると家も土地も取られ

た上に、一人の娘まで賣飛ばして借金の償却に當てる。かういふ事實の例證は、世間到處、日本社會に見出せる。

その自然の成行はといへば、酌婦が殖える、娼妓が増す、花柳病の畑は國內到處に開墾される。ために一町一人の徴兵合格者をも見ぬ始末を招く。國家の害之に越すものがあらうか。

又家を失ひ、土地を取られた一家の男子は、止むなく四方に流浪して、働きの口を求め。胸中日夜悶々たる情は、金持の冷酷なる所業である。彼は、その悶々の情を慰めるために、社會主義の燃ゆが如き宣傳を聞く。その宣傳は一言一句、彼が胸底の金線に響くであらう。社會を亂す動機とならずに止むであらうか。

併しながら、かくいへばとて個人主義を全然否定すると思ふは大なる誤である。社會は個人の絶對なる主の自覺に依つて、初めて國家を維持する神軍の力も發揮される。



それ故に、自己を見出す個人主義は、絶対に尊重せねばならぬ。たゞ物の奴隷化する個人主義を絶対に撲滅せねばならぬといふのである。

個人に一身の主の自覚なく、ために内心の自由なければ、個人は物を主として、生活の安定の道を計る。物の奴隷の生ずる原因は之である。それ故に個人主義を標準として、民族生活の安定を期するには、個人に自由を自覚させ、一身の主を見出させるより他に完全な道はない。

## 第六章 日本民族の産業

### 第一節 自給自足主義

民族的産業の發達は、その起源に溯れば、自給自足でなかつたものはあるまい。けれどもそれは、交通不便、經濟組織不備のために餘儀なくされた、言はゞ自然の結果であつて、主義として自給自足を行ふたものとはいひ得ぬ。

所が、日本の封建時代の産業状態は、自給自足が主義として行はれてゐた。小藩は別として、大藩はさうであつた。

仮に例として徳川幕府の産業上に對する主義を見れば、鎖國主義そのものゝ中に産業的自給自足主義は含まれてゐる。その徳川幕府の下に、六十二萬石の奥州仙臺藩は、等しく鎖國主義を取つてゐた。隨て仙臺藩自からも産業的自給自足主義に支配されてゐたのである。



舊藩時代の鎖國的産業の自給自足の原則として、産業に従事した主なる職人は、藩の扶持附であつた。言はゞ今日の政府の技師格であつたやうである。

藩は、その扶持附の各種の職人に、言はゞ費用惜まず、藩費の下に、産業を奨励した。そしてその産業の中で、今日いふ經濟的販路のあるものは、薄祿の藩士の家族の内職に廻し、若くは一般人民の職業に解放した。

その解放された産業は、たゞ手間賃取りの加工丈けが、藩士の家族や、その他一般人民の家に許されて、原料の購入、若くは製品の販賣は、別に藩の特許を持つた公認問屋格の商人の手に握られてゐた。一種の官營的産業組織である。

鎖國時代の自給自足は、一口にいへば、統一本位の産業組織といひ得る。若し公認問屋を特權的企業家といふならば、この企業家は産業的鎖國封建の大名の型である。恰度大名が徳川將軍の下に、政治的に特權を與へられてあつたやうに、企業家は藩主から産業的に特權を與へられてあつた。

日本は舊藩時代の例でみれば、政治方面と産業方面とでは、格の相違が非常な開きがあつた。考へてみれば、藩が太平の下に坐食してゐた時代は、政治はななくとも別段人間に不幸はなかつたに相違あるまい。併しながら、産業なしには一日も人間は暮らしては行けなかつた筈である。それに産業方面にたづさはる人間は、家の造りも、着類も、履物まで、政治方面の人間に較べて、強制的に藩の掟で、劣等に制限されてゐた。

その時代にも分業は勿論行はれてゐた。一軒の家を造るには大工、佐官、屋根屋、建具屋、畳屋等が分れてゐた。併しそれ等が銘々働いた丈け、自分等の身に附く仕掛けでないために、各自の働に時間の制限もなければ、工事の進捗に責任がある譯でもなかつた。尙ほその上に、分業はあつても、その分業に統一がなかつたことが非常な産業上の缺陷であつた。

思ふに當時の自給自足は一つは非常の場合の用意といふ點もあつたであらうが、



太平に慣れては、そんな用意は名ばかりで、その實は、江戸に於ける大名間のお國自慢の種子造りが、精々のものであつたやうである。

隨て、舊藩時代の産業の特色は、今日でいふ、多量生産本位の意味からは、一として取るに足るものはない。けれども、質に於ては、決して悔れぬ理のあることは推して知ることが出来る。恰度今日の博覽會若くは展覽會出品の製造品見たやうに大名の參勤交代毎に、各藩江戸出品の製造に腐心した跡が見える。

中でも負嫌な大藩ではその腐心が非常なものであつたと見える。例へば仙臺藩の如きは、恐らくその優なるもので、實力の豊富に任かせて、名工を招き抱へ、費用構はず名産を造らせた。仙臺平の袴地の如きは、その一つであるが、無理を通して保護の力で、お國自慢の種子を多く持つてゐたのは仙臺藩であつた。日本全國この範に倣つてゐたのは知れ切つてゐる。

事實今日日本全國を通して地方の産業の基礎をなすものは、この舊藩の保護的獎

勵の下に、産れ出た産業の外、主とすべき種類のものはない。

その最も著しい一例は、今日の岩手縣の産業である。岩手縣は舊仙臺藩の一部と舊南部藩とを合せてをる。その縣は、明治維新で舊制を全滅して、新たに明治の初年から、いろいろの産業上の試験を試みた。所が今日何が岩手縣に見るべき産業があるかといへば、牧畜、米作、木炭、製鐵、海産物、養蠶、以上の六つの外には、幾んど數ふべき種類はない。所が、その六つは、維新以前、遠い昔から舊藩の腐心努力の効に依つて發達したものである。

之を思へば、日本民族の産業の基礎は、徳川三百年の太平の下に、各藩競ふて、江戸の參勤交代の展覽會出品に、腐心努力を拂つて製出した、それらの産物に見出されることを忘れてはならぬ。舊藩の自給自足は明かに日本の民族的産業の試験的苗圃であつた。





## 第二節 産業組織の歴史的缺陷

久しい間の鎖國の下に、各藩共に小さな鎖國の型を取つて、産業的自給自足を主義とした結果、多数の藩中、同一種類の産業を競争的に奨励して發育を試みてゐたことは争へぬ。殊に又、個人に自由のなかつた時代に、何にまれ創造的な發明の出來やう筈もなかつた。型に填まつた職業を、甲地から乙地へ移して、多少の變化を加へて、乙地の新たな産業化する位のものであつた。

隨て、舊藩時代の産業は、量的に進歩の道が限られてあつたばかりでなく、地理的に、その産業の活動區域が、極めて狭い範圍に局限されてゐた。さうしてその有様は、恰度同じ封建の藩が、政治的に相互に喰ひ合つて、地理的に牽制してゐた工合に、各藩の産業も亦、同じ種類の品物を以て、牽制してゐる形であつた。

政治的に各藩活動の自由を失ふてゐた如く、産業的にも亦、各藩活動の自由はな

かつた。一體政治には果して眞の自由が味へるものか何うかは疑問である。政治なるものは、國家の本領たる統一を代表して、社會の秩序を守るのが道とすれば、政治的自由は一つの空想、夜間に太陽を望むの類としか取れぬ。政治的自由の看板は嘘である。

之に反して産業的自由は確な眞の自由である。又眞の自由なしには産業なるもの本質は嘘である。自由を認めずして産業を發達させやうとするのは、喩えていへば、不換紙幣で社會の富を増す類である。

封建時代の産業が、極めて狭い地理的範圍に限られてあつた、長い間の日本の歴史的習慣は、表面、解放されて、産業上何の特權もない、自由放任主義の明治大正の時代に於ても、尙ほ依然として、舊態を留めてゐた。勿論、昭和の新元號の下にも、その舊態は延長されてゐる。

その歴史的習慣は、確に日本の、一般組織的遺傳と見て差支はない。その遺傳の



特徴は何かといへば、狭い範囲を區域としての割據である。

例へば日本到る所に、産業組織が、政府奨励の下に成立する。所がそれが成立したかと思へば、潰れてしまつて、失敗の跡を残す。その根源は何に歸するかといへば、今言つた組織的遺傳である。

日本には個人本位でなければ産業は適せぬといふ。その個人本位といふ意味は、餘程の警戒を要するのである。個人本位といふ日本の意味は、個人を本位に割據する意味である。

同じく個人本位といへども、個人の活動を本位として、それを何所までも活かして働かして、大なる組織の本とする意味とは、日本の意味は同一には受取れぬ。

日本の意味の個人本位は、根本から大なる組織の本となるには不適合である。であるから、折角組合組織を、助成金を與へて、政府が奨励して造らせても、その助成金貰ひたさに組織を造つて、後は野となれ山となれ式に放棄してしまふ。

狭い範囲に割據して、所謂個人本位に事業に當る場合には、俗にいふ生馬の目でも扱くやうな調子で働く。この働振りは、決して輕視することは出来ぬ。共同的に事業に當る場合と、單獨的に事業に當る場合とは、その間に雲泥の相違がある。さうして何か組合若くは公共の事業に關係する場合には、屹度保護金奨励金、若くは助成金の天降りを祈る。反對に自分個人で事業經營に當る場合は、日歩三錢五厘位の銀行利息は愚、日歩五六錢の高利までも拂つて、意に介せぬといふ行方である。

かやうな調子は、餘程面白く味へる。恰度子供が、一緒に手をつなぎ合つて、橋の真中を渡らせられるやうな場合に、駄々をこねて、ばら／＼になつて、橋の欄干を走つて渡るといつた調子に取れる。考へて見れば餘程面白い。

成程かやうな所が、日本人の特徴で、社會的から批判して、西洋の進んだ社會の人間に、二千年以上も後れてをる所かと思はれる。



産業といへば、何うあつても、社會生活本位のものである。昔の武力的群雄割據時代のやうな切取勝手、又は武士的特權時代のやうな切捨御免、といった調子には産業は營まれて行かぬ。狭い地理的區域で、自給自足の産業を行ひ、特權の下に購入販賣の商法を行ふた、舊藩時代の歴史的遺傳は、最早今日のやうに産業經濟の地理的範圍が、何んな田舎を標準にしてみても、世界的に化した時代には、まるでそれは無用な、却て往々危険な病の本となる、人體の盲腸みたやうに取れる。

### 第三節 誤れる産業組織の自由

明治維新後、日本は封建の特權を破壊して、政治的には萬機公論主義を標榜し、經濟的には自由放任主義を標榜した。

所が實際は何うかといへば、昭和時代に政治上初めて普通選舉が曲がりなりに實行される。維新後の日本の政治は、確に文字通り、少數特權階級の手により自由に握ら

れてゐた。

自由には違ひない。その自由は併しながら、強者の自由、羊の前の狼、牛の前の虎の自由であつた。薩長の虎狼の軍は、羊のやうな各藩を威しつけて、牛のやうな東北の同盟佐幕の各藩をも踏みにじつた。さうして明治政府の下に、虎狼の自由を態にしたのである。

何のことがあらう。以前幕府の下に各大藩が、政治的特權を弄して、特權附商人や、扶持附職人を利用して、藩費を以て産業を奨励し、算盤珠に合ふ種類は、賃仕事に貧乏士族の家内や娘の働に出し、或は廣く人民にも稼がして、家計の資を恵んだやうに、薩長は國家の下に、等しく政治的特權の力で、産業の發展を試みた。凡てが舊藩そのまゝの延長である。

唯以前と維新以後との相違の點は、地理的區域が範圍を擴めた丈けである。隨て産業方面の活動の自由は、地理的に確に羈絆を脱したといひ得る。



それではその産業的自由は、その地理的自由の外に、何があつたかといへば、他に如何なる自由をも見出し得なかつた。

薩長の所謂閥族政府の下には、政商の發生を見た。その政商は、特權附の大藩の商人の延長といひ得る。又政府の下には月給取りの技術者が雇はれた。それは藩の扶持附職人の變形である。

かうしてみれば、舊藩時代の産業組織と、維新後のそれとの間には、地理的自由の解放の外に、有形無形、何が見出せるであらうか。

日本の産業組織は、維新後英國式に化した。その式は自由放任主義の英國の新式であつた。英國がその新式に達するまでの歴史には、社會的に幾多の試練が積まれてある。日本はその英國の社會的試練は柵に上げて、自由放任主義の式丈けを取つた。

言ふまでもなく、日本の産業組織にも、深い歴史の遺傳がある。又勿論英國のそ

れにも、深い歴史の遺傳がある。日本はその二つの遺傳附の産業組織を、交尾させた形である。明治に交尾させて、大正に一代雜種を得た。

遺傳の法則は近來矢筈敷く研究されてある。日本産業の大宗といはれる養蠶製絲を初め、その他東北地方の牧畜の如き、遺傳法の適用で、非常な改良進歩を來たした。その遺傳では、一代交配種が一番精力が強いといふ。

日本の産業組織も、大正一代雜種は、大なる精力を以て、偶然にも歐洲大戰の時局に乗じて、日本に黄金の雨を降らせた。大正の勢は全く、日英産業組織の一代交配種の賜といひ得る。

昭和時代は、その組織の變化が、最も危険な時期である。蠶の例に徴しても、二代雜種は遺傳的に原種の長所を發揮せず、却て短所を發揮し、原種に還元される傾向が強い。この傾向は蠶や馬の場合とは違つて、大なる國土の上の社會生活を支配する、産業組織の場合には、決して輕々に看過され得ぬであらう。



産業若くは經濟上の自由は、その中に取扱はれる物資若くは貨幣の地理的移動の自由とか、或はそれらを取扱ふ人間の、それらに對する所有の自由とか、そんな形式的な性質のものと思ふは、非常なる誤りであらう。

自由は一切を通じて變化はない。自由は人間の生命そのものである。

封建時代の自由の束縛は、民衆の生命の束縛であつたであらう。特權階級とは、民衆に對して、生殺與奪の特權を掌握した、社會少數の人間の謂である。

政治的自由の嘘といふのは、特權そのもの、本體が、政治そのものにあるからである。けれども自由は、政治的自由にしる、産業的自由にしる、一切を通じて變化はない。自由の本體は生命そのものである。

産業組織の中の英國の自由は、現在、政治の形式に化しかけてをる。日本のそれも、亦同一徑路を示しかけてをる。遺傳の法則から見て、決して不思議はないのである。

英國の自由は、宗教方面に於て、或は政治の方面に於て、過去の歴史が物語るやうに、民衆の生命の自己延長に働いてをる。その革命の本はといへば、常に失はれたる自由の回復の外にはない。現在英國の社會には、産業的に失はれたる自由の回復が叫ばれてある。

日本では、その英國の自由が、無形の生命ではなくて、兎もすれば有形の物質であるかも知れぬ。誤れる産業組織の自由といふはそれである。

#### 第四節 産業的企業家

日本現代の生産的工場は、平和戦の城と見て差支はない。その城主は明かに武力時代の城主に較べられる。

武力時代の城主は平面的な領地を本位に生きてゐた。今日の工場主は、その域を超越して、立體的な社會の信用を本位として生きてをる。



その工場主の社會的信用は、具體的に何を以て表徴されるかといへば、それは資本である。資本の力はよく物を支配し、且つ人を支配する。武力時代にあつては、武力そのものが資本であつた。武力は物を支配し人を支配する唯一の力であつた。今日の資本は明かに昔の武力である。その武力に活きた各藩の大名は、資本時代の今日の信用に活きる工場主に當る。

昔の武力本位の大名は、亂世に於ては、認めらるべき資格があつた。けれども太平の世の中では、陸に上つた河童の類である。

幕府三百年の大名は、徳川のために妻子を人質に江戸に取られて、グウの音も吐かず、參勤交代の苦しい勤奉公を強ひられた。まだそれでも領地の主として、領民から租税を取つては、徳川の無理な搾取に應じてゐた。大名なるものは、實際大きな奴隸であつた。

東北には今も名子といふ、一種の人民の階級がある。名子はその領主の管下に於

て、生命財産共に領主の支配にある。一種の奴隸といひ得る。その名子の毛の生えた大きいのが、徳川幕府の大名である。大きな顔はしてゐても、その實は頭の擡らぬ奴隸であつた。

今日の産業界の工場主階級は、昔の大名に奴隸の點までそっくりである。今日の日本に於て、全國を通じて、獨立自由の立場にある工場主なるものが幾人あらうか片手の指の數ほごにも足りはすまい。

今日の工場主の一般は、銀行の金に利息を拂つて、その事業を經營してをる。その真相はといへば、全く金利の奴隸である。

幕府時代には、大名に領民から租税を取らせて、そして徳川がそれを捲揚げてゐた。今日は、工場主に勞働者から勞力の効果を捲揚げさせて、そして政府がそれを搾取してをる。見掛けは以前より遙に巧妙である。

何所にその巧妙さが一番よく潜むかといへば、政府は自分と工場主との間に、銀



行といふ、利喰生活階級を狭み込んでをる。その點が一番だ。

徳川は直接大名から金を擡揚げた。今の政府は短刀直入に工場主には觸れずして中間の利喰業者に直接仕事を遣らせてをる。工場主は奴隷には相違ないが、誰の奴隷であるのか、一寸見當に迷ふ。

所が自分の雇ふてをる工場の労働者は、賃銀關係から、常に工場主の奴隷であると信じてをる。日本にはかうした關係から、誰の奴隷か分らずに實際奴隷である工場主の下に、明かに工場主の奴隷と信する工場労働者階級がある。

日本の産業社會組織には、かやうな二重の奴隷がある。一つは企業家と呼ばれ、一つは労働者と呼ばれる。さうして二つの奴隷が、日本産業社會の表面に、自由放任主義の英國の遺傳を、二代雜種の形に於て原種の弱味を發生する。

奴隷には物が生命である。彼等には自由の眞の意識はない。英國人民の最も嫌ふ所のは、奴隷である。日本の企業家並に労働者階級は遺傳的に奴隷を平氣で受

ける。幕府時代の百姓町人士方の血のためである。

二代雜種に現はれ來る英國の自由の形は、日本社會の空氣の中では、確に無形の生命には現はれず、有形な物質に現はれ來るのは見易い道理である。

日本現在の企業家は、金利の奴隷的境遇から解放される希望に燃える間に、労働者は賃銀奴隷の境遇を脱せうと熱望する。

若しその間にあつて、企業家が心機一轉し、労働者に説くに、利喰生活階級が生産従事者の公敵であることを以てするならば、日本は恰度英國の地主に對した穀物條例撤廢の歴史を繰返す。

問題は日本に、公敵の前に一致する雅量が、生産従事者階級に見出せるか否かの一事である。生産従事者階級は、企業家たると労働者たるとを問はず、狭い區域に割據して、榮螺のやうに角突き合はすが、唯一の能と取れるからである。



## 第五節 労働者階級の遺傳

表面、平和戦争の兵士の實ある産業的労働者階級は、裏面、實際非常の場合に際しても、少なくとも後方勤務の兵士として國民的に認められねばならぬ。その表裏二面の産業的労働者階級の立場が、歐洲大戰に於て、英國に於ても公に認められた。

その英國の労働者階級が、初めて社會の表面に、公然團體的運動を開始して、生存權の要求を叫び出した際、産業方面から、その運動の軌道が、國法方面へ脱出した。さうして熱狂的に進んだ労働者は、社會の秩序を亂す一揆の觀を呈した。その結果、一時芽を出した労働團體が、根本的に消滅させられた。

かゝる労働者階級の遺傳も、英國社會の産業組織には潜んでをる。併し英國の労働團體運動はそれから初めて純化されて來た。最初の團體運動には産業方面から見て不純な政治的分子が濃厚に含まれてゐたのである。チャーチズムがそれだ。

日本社會の労働者階級を、若し今日の英國労働者階級と等しく、表裏共に、國防上の兵士として取扱ふならば、その労働者階級に現はるゝ過去の日本の足輕歩卒の遺傳がないとは保障されぬ。

昔の歩卒は武力的切取勝手の世の中で、蜂須賀小六式に仲間と組んで、直接行動を行ふた。又幕末の足輕は浪人して四方に遊説し、明治維新の魁をした。昔の歩卒で大名化した人間は少なくない。又幕末の足輕で大臣化した人間も少なくない。全く時の運りである。

かういふ種類の所謂青雲的遺傳も日本側の遺傳には潜む。人爲でなくて、自然の働に依る、言はゞ東洋一流の遺傳である。王侯相將安んぞ種あらん式の遺傳は、何所の隅の労働者の血にも宿る。

大正の末から、普通選挙に直面して、日本の労働團體は、政治的色彩を濃厚に現はして來た。その労働者團體は、最初から産業方面の素質よりは、政治的若くは社



會的方面の素質に富んでゐたのは争へぬ事實である。

昭和時代の二代雜種の労働者團體が、如何なる原種の色を出すか。それは單に時の問題に委ねられやう。けれども若しその團體が、産業方面を脱出して、國法方面に生存權の要求を叫ぶ場合は、英國式の初期の労働者團體運動の遺傳的發揮と見て差支なからう。

若し又日本の労働黨が、如何なる名義、又如何なる綱領を掲げて、立憲的に政權に近づくことを求むるならば、それは英國最近の労働者階級と等しい遺傳の發生と見られ得る。

若し以上の英國式の遺傳を現はさず、純日本の遺傳を現はすと假定するならば、一つの蜂須賀小六式の直接行動、或は他の一つの幕末浪人式の維新運動、何れかを現はすものと想像される。

元來今日の産業組織の行詰は、幕末の行詰そつくりである。資本主義擁護と佐幕、

資本主義打破と討幕、勞資協調と公式合體、形式はそつくりである。

併しながら、以上の三つの形式の何れが、維新に最も多く役立つかといへば、何れも内部の運動として、維新を醸す役には立つたとしても、直接維新を造り出すには、尙ほ以上の三つの外に、力のあつたものがあつたことを認めねばならぬ。それは何かといへば、一つは伊井大老の行へる現状打破、他の一つは水戸派の唱道せる新たな統一の中心である。

伊井大老の現状打破は、開國に依る日本社會の新たな環境の發見である。又水戸派の新たな統一の中心は、日本が現状を打解して、新たな環境に飛び出しても、自己を失はぬ統一の力である。以上の二つは、二つにして一つ、進化に對する場合の組織的有機體が、必ず備へねばならぬ、絶對必要條件である。

要するに、産業組織の行詰は、時の問題として、打解の機運は到來する。その場合、自己を失はぬ統一の中心が、新たに社會に見出さるゝ必要がある。その新たな



統一の中心は、即ち、社會の普遍的個人の、一身の主であるのである。その主を發揮する遺傳が、日本側の勞働者階級には、絶對にない。若しそれを日本側の遺傳に求むるならば、勞働者階級としてではなく、純然たる自然の人間としてあらねばならぬ。

## 第六節 生産者の魔物

普通世間の人々は、小作爭議だ、勞働爭議だといふ事が、何うして起るものだらう、あんな騒ぎをしてゐたなら、國は必ず亡びてしまふ。かう思ふ。さうして彼等は地主の立場の人間や、小作の立場の人間、及び工場の雇主並に勞働者階級が、何とかもつと自覺がありさうなものと思ふ。

一寸一般の局外者からは、以上のやうに考へられるが普通である。併しながら、實際は、その普通の局外者の考は、全然間違とはいへぬまでも、皮相の觀に過ぎぬ。

一體今の社會組織の小作爭議並に勞働爭議なるものは、今の社會の病氣である。その病氣の根は何かといへば、社會に通用さるゝ貨幣なるものである。

貨幣は國の寶、社會生活から見れば、喻へていへば、恰度身體の血液に較べられる。その貨幣が、現在、社會の病氣を起してをる。小作爭議も勞働爭議も、その本は、この貨幣のためである。

さらば貨幣は、國の寶として考へるのは誤りで、國の毒として取るのが至當かといへば、決してさうではない。貨幣は何所までも國の寶であるには相違ない。決して貨幣は國の毒、或は社會のバチルスではない。

それでは、何故貨幣が、現在社會の病氣の本かといへば、その貨幣に寄生して、社會の血を吸ひ、一般生産者の生命に祟をなすものがあるからである。そのものが國の毒であり、社會のバチルスであり、且つ生産者階級の魔物である。

併しながら、魔物といふものは、妙なものに違ひない。一口にいへば、それはあ



りがたいものである。勿論、そのありがたいのは、難有屋に限る。一種の己を知らぬ他動的な迷信者の行爲である。

例へば盆の拂ひに金がない。その際、利息は幾らでも、金を貸して呉れるものがある。それは難有い。又目の前に来るお正月に、家のもの、春着、正月の雑用、さういふものに金の入る場合に、金を貸して呉れるもの、或は一家に不幸があつて葬式費、醫者の拂、さういふ入費を都合して呉れるもの、さういふものは、確に夢中に難有い。

けれども、時が立ち、利息が殖え、利に利がかさみ、元利の仕拂に、春夏秋の養蠶の繭代でも、娘を前借で稼がせても、土地を賣つても、尙ほ足りない場合が尠なくない。さういふ場合が、世間を見れば、數限りなく見出せる。

窮した場合には、金は地獄の佛の顔だが、難有さは束の間で、立ろに魔か鬼かに變化する。今日の社會組織の下にある小作人、並に工場の賃金労働者階級は、勢い、

その魔物に引ずられて、他動的な迷信者に陥り、血を吸はれ、毒を受け、終には自分等が、國家の毒と化し、社會のバチルス化してしまう。實は不幸な境遇にあるのである。

普通、小作爭議の起る場所は、作物が一種類、米ならば米に統一されてある。さういふ場所では、生産者側の立場から、米質改良などに依つて、米の格を引上げて行く。随て米の單價が高い。

さうなれば、地主も小作人も、金を標準として、喜ぶのは當然だ。所が地主の方には問題でないが、小作の方には一つかういふ問題が起る。つまり所、自分の作つた格高の米を全部賣つて金にして、内の飯米は格下の四等米か外國米を商人から買ふといふことになる。

小作の側になれば、専門に米を作つても、自分等の喰ふ米を買ふ勘定である。彼等は自分等の努力の結果を、全部金に化して、手に握るからである。その場合の小



作人は、工場に雇はれて、賃金で働く労働者と、全く同一境遇に立たされる。金の祟に悩むのは、これからである。

若し手に握つた金が、直接、生活の資として役立つものならば、別に何も問題はない。併しそれは絶対不可能な事柄である。それで小作並に労働者が、手にした金で生きやうといふには、純然たる消費者の立場に立つ譯である。自給自足は影もなく、全く他給不足の境涯に陥つてをる。

その境涯に乗ずるのは、消費者對手の商人階級である。普通一般商人階級は、生産物が何であらうと、そんな生産にも、或は又消費にも、そんな側には眼はなくて眼の焦點は單に金にあるばかりだ。

貨幣に寄生して、生産者の血を吸ふものゝ一種は、この商人階級である。隨て商人階級は、確に生産者の一種の忌むべき賊であるといひ得る。

けれども、それらの商人階級は、まだく腹中の小さな蟲の類である。社會に對

して、貨幣を通し、生産者階級の血を吸ふものは、他に怖るべき大きな體をして存してをる。それは所謂利喰生活者階級である。この階級が、眞に國家の害毒の本であり、社會の病氣の根であるのだ。

生産者の眞の魔物は之である。世間普通の商人階級は、この魔物の小物に過ぎぬ。日本の現状はこの大小の魔物に祟られてをる。國家が大なる消費者として、年々豫算の膨脹を餘儀なくなれ、又社會が大なる生産者として、年々爭議の増加を餘儀なくされるのは、一にこれらの魔物の所爲であることを知らねばならぬ。

## 第七節 生産者の無自覺

愚は賢の食物であることが、生物界の原則であらう。必ずしも、大小強弱の差別ばかりが、自然淘汰の本ではない。獅子心中の蟲とか、人間の條蟲とか、血を吸ふて活きる蟲などは、蟲の中では賢い仲間である。それに獅子も人間も斃される。そ



の原因は一に無自覺の一字につきる。

無自覺とは愚の意味である。一般に現代日本の生産者は愚だ。その愚を裏書するものは、彼等の血を吸ふ、貨幣の寄生蟲たる利喰生活者、並に利鞘生活者の賢だと思ふは、大なる誤りである。

生産者が愚なる證據は、生産者自身の愚を守ることが忘れて、貨幣の寄生蟲たる賢を倣はんとする一點である。

生産者はかういふ。成るべく少ない資本でもつて、成るべく多い利益を上げる。眞に聞いて結構に聞ける。が、その祟は何かといへば、直接その生産業に對する、サボタージュ及び粗製濫造である。

生産者の一面に立つ雇主側は資力本位で働く。それで資本といへば金を意味する。が、他の一面に立つ労働者側は勞力本位で働く。それで雇主側が、少なく資本をかけて、多くの利益を上げると、同じ歩調を取るために、労働者側は又、勞力を少な

くかけて、多くの賃金を取り上げやうとする。決してそこに不調和はない。立派な一つの勞資協調である。

勞資協調といへば、立派であるが、それには種類がいろいろで、以上のやうな、勞資協調主義は、極めて生産上譽められぬ。勞資協調などいふ事柄が、若し生産者側から自發的に出たとすれば、生産者の愚は一層愚の上塗りである。

勞資協調主義は、生産者を食物にする、社會の利喰生活者若くは利鞘生活者の溫い情の夢である。

近頃、日本に盛に奨励されて來たのは、生産方面の組合組織である。その組合組織の根本精神は、弱肉強食の自然淘汰の道に於て、小さな境遇のものが、大きなものに對して、自強自衛を策る、俗に言ふ、背に腹は替へられぬ、絶對悲愴な立場に立てる、人間社會の共同精神である。

その精神の最も認めらるべき場所はデンマークであらう。デンマークのこの精



神は人民にあつたといふよりは、寧ろ人民の境遇にあつたのである。普魯西と埃太利とに攻められて、スレジツク及びホルスタインの地を割き取られ、人口並に國富の過半を失ふた。あのデンマークの境遇が、國民にその精神を喚起せしめたのである。

このデンマークにあやかる意思が、若し日本の官憲者流にあるならば、識者の言に耳をかさず、自畫自賛で國を弱め、社會を毒して、第二のデンマークになるに限る。けれどもそれでは日本民族の立場が無い。又日本民族の血の中心が失はれる。さうして日本民族はそれまで吞氣にしてはをるまい。神州には尙ほ不滅の神軍の靈が宿る。

官憲獎勵の日本の現在の産業組合組織を見れば、一見して生産者の無自覺を認むることが出来る。産業組合が、地理的本位で、その地方の人間は、實際生産者でないものまでも、網羅する有様である。勿論、實際生産者以外の人間は、土地の物持、

或は物持の先棒たる智識階級の腕持といひ得る。

その物持が組合の理事として、個人本位に中心に立たねば、組合に信用がない。組合は法人の資格で金の融通を附ける道が、まだ組合法で認められてをらぬ。それで組合の金融の道は、理事者個人の信用である。物持ちならぬ人間は組合の理事たるべき資格がない。

かういふ地方の物持の人間は、普通地主兼金貸業者といつて可い。一口にいへば利喰生活者である。この種の人間に、若し背に腹は替へられぬ立場の精神を求むるならば、それは單に組合員の肉を喰ひ血を吸ふ精神を求むる外はない。

日本現在の産業組合中には良質の組合がないとはいひ得ぬ。そんな組合のある場合は、地方的に、一種のデンマークの特性を有つ。自然の力の壓迫脅威で、土地の人民の生活が立ち行く道が困難とか、或は自然の弱味の關係から、生産物を商人に踏み倒されるとか、そんな事情の下に、一種の小さな村落的デンマークを造つてを



る。そんな地方には立派な組合が成立つのである。長野縣下天龍川筋の村落がさうである。

併しながら、他の交通便利の衝に當る地方などでは、産業組合の看板をかけて、個人本位の株式會社だか、或は匿名合資會社だか、怪しい正體の組織が目撃される。場所に依つては一つの組織に三つの名前を出して、三面六臂の二本脚の姿を想像させる。宮城縣下の田尻の農業倉庫の如きは正にその一例であつた。

日本現在の産業組合は、一方には低利資金を流用して、利喰生活者の懐を温め、他の一方には地方の生産者を「だし」にして、甘い汁を吸ふ地方本位の伶俐者の企業である。目的は何にあるかといへば、單に金の利息、金の利鞘の外にはない。社會の病毒、國家の弊害の泉である。

## 第八節 政府の無責任

政府は社會の指導を以て任じて來た。その政府を見れば、維新當時祿を離れ、扶持を失ふた、所謂失食者の飼場の觀があつた。

政府の官憲者は、治者階級といふ、昔ながらの情力を以て、普通社會の人民を、牛馬同様、棒を以て指導命令して行つた。政府官憲の指導には、人民を賢くする働はなく、却て愚にする働があつたのは明かである。

實際今でも、官憲者自から譯の分らぬ事柄を、人民指導の名に依つて強制する。強制した事柄が、まだ右か左か方角も分らぬ内に、官憲者は椅子を去つて、その事柄には馬耳東風である。

地方の生産獎勵、組合組織等に當る官憲者の様子を見れば、以上の言葉の決して空でないことが證明出来る。

さうして、それらの設備が、その半面に於て、自然に伴ふ怖るべき性質を、何の豫防もなく放任して、擡頭させて顧みぬ所など、官憲者の無責任、無自覺が證明出



来る。

官憲者の無責任といふは、自から國家の代表たる、政府に籍を有ちながら、さうして政府の力で食を喰ひながら、この國家を裏切る行爲があるからだ。

又彼等の無自覺といふは、弱い羊の群を導き、虎狼の餌から群羊を保護する任にありながら、却て虎狼を導いて、群羊の肉を喰はしむる行爲が彼等にあるからである。

さらば如何にして以上の如き、無責任及び無自覺の行爲が、現在政府所屬の官憲者に認められるかを述べて見やう。

元來、現在の生産組合組織なるものは、社會本位の共同生活を旨とする。さうして、その生活を維持するための道として、産業的に自治を營む。その組織の運用は確に共和的である。

それ故に、日本國內の個人本位の物持理事を中心とする産業組合なるものは、虎

狼に羊の皮を被せた姿であることは、明白な事實であらう。若し之を一步進んで評すれば、共和國の大統領が專制的心理の持主であるのと一樣である。かくて日本の生産社會を、赤裸々に解剖すれば、形は共和で、眞は專制といふ、世界に二つと類のない、赤露の姿そつくりである。日本國家を裏切るものでなくて何であらうか。又日本社會の弱者の肉を強者に喰はす、手引者でなくて何であらうか。

日本政府の官憲者の態度を見れば、さながら遊廓の昔の女郎の態度そつくりである。官憲者が地方生産奨励の趣意と稱して、地方に與へる奨励金は、女郎の吸付け煙草の力がある。その力に引かれて、臍線金まで搾られた上、覚えもない病氣に取りつかれて、女郎の顔を思ひ出しては、一種變つた恨を一生繰返すやうに、地方官憲を恨む人間は、今の世間に何れ丈けあるか分るまい。

女郎の態度が、相手の客のかゝつた病氣に平氣なやうに、官憲者も亦、地方人民の損害にはシャークとしてをる。尤もな態度である。色と慾との差はあつても、女



郎買と地方民とは、馬鹿さ加減は一つである。

兎に角この手で、日本社會の生産は、發達の好運に向ふよりかも、衰退の悲運に陥れられる。官憲の無責任、無自覺が、社會民衆の愚と一致して、ますます勢を加乘するのである。

一體、生産を本位として考ふれば、各地方に生産本位の試験所がある。その試験の設備を見れば、あれで何がと、見る局外者の眼にも映れば、實際之で何がと、當の試験従事者も言ふ。金の注ぎ方が少な過ぎるのである。試験所は、人間が揃ふても、設備不足では、何の役にも立たぬ。金が不足で、人間の頭も不足と來ては、尙更である。

試験所の實際を評すれば、燃料使ひがケチ／＼して、米は半煮で飯にはならず、食はずに何時も棄てる式である。使ふ金が丸死にで、試験所は人間の飼場である。要するに、日本の官場なるものは、その根本的性質が、社會人民の幸福と一致す

るやうに出來てをらぬ。一口にいへば、官場そのものは專制的奴隸の畑である。かかる官場氣分に支配せらるゝ日本の産業は、何時まで立つても同じこと、弱いものの肉が、強いものゝ餌となる一方である。

又何事も羨切らずに、日本の物事は終つてしまふ。官場氣分の遣方では、凡てに眞の熱がない。日本民族の血の保全を本位として、日本社會の生産業を考ふれば、根本的に官場氣分を社會の人心から取除く必要がある。一口にいへば、人心に自由の生命を吹き込むのである。

## 第九節 産業立國の基礎

近頃日本に、政黨の政策を通じて、産業立國の聲が聞える。政黨の政策は社會の趨勢を追ふ。政黨の政策あつて、初めて産業立國が成立つのでなく、社會に民族の生活を本位として、産業立國の必要が生じてをるからである。



元來、國家の政治は消費本位であるのが常である。併しながら、必ずしもさうとはいひ得ぬ。自由國では生産本位である。勿論、如何なる專制國でも、消費一方では立ち行かぬ。随つて社會に生産を奨励する。その奨励の目的は、國家の消費のためである。

日本に近來、産業立國の聲を聞くのは、日本が專制より自由へ、國家の政治的方针を轉換する一證と取れる。さうして日本は、國家として、社會の生産的基礎を根本から立て直す方針であらう。

社會の生産的基礎は、主として何にあるかといへば、人民の生産に對する働きの自由一つである。場合に依れば、身體移動の自由、労働時間の短縮、及び賃金の増加、さういふ事柄が、生産的基礎の働きの自由のやうに取れる。併しそれは確に民族的生活を本位とした生産から見れば、第二義的の部類に屬する。第一義的の種類としては、人民の心の自由を取らねばならぬ。

假に日本現在の一般労働者階級に、身體移動の自由、労働時間の短縮、及び賃金の増加を實現すると假定した場合、その結果は何うなるかといへば、體の自由に、金を使ふ時間が増して、自己破壊の機會を増す外、他に何の結果をも得はずまい。一口に言へば、自縛自縛の結果を來たす。

尤も、労働者中の先覺者は、さうした自己破壊に依つて、労働者の自己發見を行ふであらう。併しそれは、個人としてではなく、團體としての立場である以上、労働組合團體中の中心人物の仕事と見て差支ない。それらの人物は、體の移動の自由でも、時間の自由でも、金の自由でも、三拍子揃ふて有つてをる。

一體、労働者階級としては、民族的生活の生産本位からいへば、心の自由が先決である。その心の自由なしには、第一、生産労働者としての價値がない。生産労働者たる唯一の貴重な資格は、何かといへば、自然征服者たる一事である。

自然を征服する資格あるものは先づ人間の被征服者たる境遇を脱せねばならぬ。



言ひ換ふれば、專制的羈絆を脱却して、自由の生命を味はねばならぬ。日本社會の一般勞働者階級は、自己の心に專制的氣分の束縛を有つてをる。俺だつて人間だといふ、さびしい心がそれである。己にその心が奴隸的根性である。

苟も國家が如何なる形式に於ても、産業立國を國是として取るならば、その基礎として、社會民衆の心に、徹底的に自由の生命を植ゑ附ける必要がある。

若し日本に取つて、民族的生活の必要上、産業立國の餘儀ない場合は、神軍の力に依つてども、その基礎を固める必要がある。

英國人民の歴史を緋けば、グリーンはかういつてをる。英國に凡ての方面の發見發明の發生したのは、英國民が過去の專制的羈絆を脱却して、初めて心に自由の生命を回復したためである。

發明發見といふ事柄は、人間の自然征服の先驅である。それなしには、自然征服の本體たる産業の發達は期せられぬ。

日本に何の發明發見があるであらうか。學者は三越白木屋式の輸入本位のデパートメントといふ惡口がある。尤も學者は何所の國でも、發明家でも發見家でもないのが當然である。

では一般社會に發明發見があるかといへば、それも無い。無いのが蓋し當然である。專制が社會を支配し、官場氣分が人心を拘束してゐて、發明發見のあらう筈はない。若しあつたなら、それは世界の奇蹟の一つだ。

心の自由そのものが發明發見の母である。自由なしには、人は必要の感じが無い。日本の社會に靜的生活を強ひ、家は堀建、着物は紙子、副食物は大根の澤庵漬、かういふ掟で生活の程度を制限したのは、一面から見ても一理あるには相違あるまいがそれに伴ふ必然の專制的束縛が、社會民衆の心の自由を拘束して、安心して無爲に眠らすやうな境遇に導いたのは争へぬ。拘束は子供を背に括るやうで、力のない間は、それが却て安心の本となる。併しそれでは無爲に眠つてしまふ。何の必要も不



安も感せぬ。必要なければ考へはせず、不安なければ、自發的に力も出さぬ。自由が生産の根本的基礎たる所以はそこである。

若し政治家が産業立國の基礎的條件を形式並に物質の方面に取るならば、確にそれによつて政治家自身立場を失ひ、却て産業立國の基礎を破壊するに相違ない。

日本民族の血の保全を本位としての、産業立國の理想は、民族的生命の自己延長の外にはない。若し政治家が、その政策として取る産業立國を、法律並に資本の如き、形式と物質との範圍に限るなれば、彼等の政策なるものは、民族の血を毒し、國家並に社會を害する奸策である。

## 第十節 産業組織の歴史的延長

日本には、以前から、地方自治が政治的に叫ばれてゐた。今日では、知事の公選まで、長野縣の縣會では決議された。その政治的自治に伴ふて、産業的地方自治が、

産業組合組織の下に、着々として發生して行く。

地方は、事實が證明するやうに、政治的自治のために、疲弊を免れぬ。政治は、何と辯解しても、消費が本位であるからだ。

それで、その地方政治に、自治の理想を有意義に實現せしむるには、地方の産業を自治的に發達せしむることが、最も必要に相違ない。

地方の自治的政治は、表面、形式的に全國劃一的に行はるゝやうに取れても、その實際は、地方の自然と歴史との關係からでも、各地事情を異にして、劃一に内容を保つことは絶對に出来ぬ。殊に人が違ひ、經濟事情を異にする關係から、尙ほ更劃一は不可能である。

けれども、日本國家を本位として、その統一の下に自治政治を行はせるには、止むなく劃一が、或範圍までは必要であらう。例へば國民的義務教育の如きはその一つである。



國家が地方に政治的自治を認めて、尙ほ國家統一上、必要とする範圍に於て、劃一を強制する以上は、地方を本位として、その財源の最も有利な基礎を見出させる必要がある。産業の地方的自治は、その必要に應ずる目的に相違ない。

事實地方は、産業的自治の確乎たる基礎なしには、政治的自治を理想的に實行するは不可能である。

かくて、その實行方法に問題は移らねばならぬ。思ふてこゝに到れば、日本の過去の封建の歴史の跡を追想する。

日本の徳川幕府の封建の跡を見れば、政治的並に産業的兩方面に於て、地方的自治の實行を見出すのである。唯、今日の眼から見て、恰かも晝から夜を見るの感あるのは、幕府時代が專制本位であつたからである。

假に若し徳川幕府の封建の形式を、そのまま、專制から自由へ移したとしたならば今日政府當事者並に地方の人民が、理想として希望する地方的政治並に産業自治と

何が異なる所があらうか。

專制時代には、鎖國の内、各藩鎖國の分子であつた。自由時代の今日では、開國の下に、各地方開國の分子である。日本は國家として、又日本國民は國民として自主的自治を本位とする。今日日本の政府者並に地方人民の理想とする點は、その自主的國家の内、地方を本位に、自主的自治の分子たらんとする外はない。

明治維新は、文字の通り、盲目的に日本の社會組織を破壊した。それは結構な事柄であつたに相違ない。その破壊の後で、さらば日本は何を新たに建設したかといへば、何ものも建設はせぬ。建設する餘裕なくして、實は俄の借建をした。英に借り、獨に借り、米に借り、佛に借りて、今日ある。その中で、産業方面は英に借りる所が主であつた。

けれどもそれは、恰度帝都の大震災當時のバラックの式で、時の支配で立直しを餘儀なくされる。



帝都の復興といふのを見よ。如何なる道を取らうとする。あの六十年目一回の例で、大震災に見舞を受ける江戸の跡に、矢張、帝都を築かうとするではないか。それといふのは、徳川幕府三百年の歴史に何ものか、現代的政治の基礎が見出されるからであらう。

若しその一事を萬事に照らして一考すれば、地方の問題も、自から同じ歴史が、現代の事相に適する、基礎となり得ることが發見されやう。

明治維新後、政府は餘りに中央集權に傾き過ぎた。その結果は、政府樞要の位置の官權者まで、中央集權の毒の過大に膽を冷してをる位である。

徳川幕府時代には、江戸といへば、純然たる消費地であつた。言ひ換ふれば、政治本位の霸道の府であつた。

今日の東京は生産的都市の實を占めかけてをる。行き過ぎた中央集權の結果である。この自然の反動は何かといへば、地震、火災といふ怖ろしい六十年目一回の自

然の祟の外に、何年目といふ保證のない、人爲の社會的洪水の憂である。

帝都復興は、地震、火災、並に非常の場合の敵の爆彈の豫防に心を注いだ。けれども、この社會的洪水の憂に對する豫防の道を何う講ずるか、その點は有や無やであつた。

若し帝都が、徳川幕府の跡を襲ふて、今後東京に定まるものとすれば、民族の血の中心擁護の必要上、帝都の産業を地方へ吸収させることが、絶対に必要である。民族の中心は、無の實在の眞である自然の理から言つても、この一事は實行せねばならぬ事柄である。

この事柄は、徳川幕府の武力に次ぐに、資力を以てする現代日本の社會組織が、鎌倉以來七百年の歴史を活かす道である。

歴史は強い。それは決して形式的表現の過去の事相としては強くはない。形式的表現の歴史は愚者のための先人の足跡である。けれども歴史は民族的生命の自己延



長の力として強い。それは現在日本社會の民族の各自の血に潜む力であるからである。

## 第七章 産業の組織的革新

### 第一節 地方的産業統一

地方的自治を、政治の上に行ふには、地方的産業の自治的能力なしには、無効である。無効なばかりでなく、却て地方を疲弊させる。消費は絶対に生産と伴はねばならぬ必要がある。

親しく地方を見れば、産業的に意義ある發達の基礎を有つ地方は、土地の人間の血に、その産業が同化されてをる。それが地方的産業の一番大きな強味である。

例へば長野縣に入れば、縣下の主たる市町村には、製絲工場の煙突が見え、白堊の繭倉庫が建ち、化粧を凝らした女工の群が通り、蛹の異臭が人の着物からまで立つ。さうして見渡す畑といふ畑は、凡て根刈りの桑畑である。長野縣は、蠶絲業に於て地方的に統一された、日本第一の場所である。隨て地方的政治の自治も亦全國



に冠たる力がある。

元來長野縣は、その自然の風土が製絲に適した關係から、かうした異様の發達をなす基礎が備はつてゐた。けれども、それだけでは、長野縣の發達は出來なかつた。

同縣は天恵に乏しい土地柄である。それで最も集約的に利益の上る蠶種製造を手始めた。さうして、土地の自然の關係から、之で喰へなければといふ、必死の覺悟が附纏ふた。その必死といふ覺悟の人間の方が、長野縣を蠶絲業を本位として今日あらしめてゐる。

地方を、その土地の自然に依つて、産業的統一に向はすのは、その土地の人間を、無理にも「之で喰へなければ」主義に赴かせる趣意である。併しそれは現在の日本政府の官權者流の如き、生温い指導振や、又普通の資本家階級の如き、臆病な腰骨では、實行は困難である。

實際長野縣の岡谷は、現在表面は二ヶ村位な場所であつて、製絲女工三萬以上を收

容してゐる。その盛大は言ふに及ばず、尙ほ進んで、日本全國、蠶繭の所在地に、製絲工場若くは繭の乾燥設備を所有してゐる。その起りは何うかといへば、唯一人の製絲家と、唯一人の銀行家との、之で喰へなければ主義の必死の覺悟が本であつた。

その銀行家は昔の無鐵砲な役人にまで、往々亂暴だと叱られたといふ。今日のやうな神経質な役人ならば、その銀行に營業停止まで命するやうな騒をするかも知らぬ。

兎に角、事業は人にある。事業ばかりでない、一切が人だ。さうして、その人は、必死の覺悟の人である。戀するでも、必死の覺悟でかゝるならば、如何なる戀も成就する。

さうして出來上つた事業、例へば長野縣の岡谷地方の蠶絲業の如きは、根が強い。何うしてそれがさうかといふに、それは單なる形式の自己表現といふ、流行を追ふ



女の着物や或は化粧、若くは官權者流の指導や、獎勵の事業とは性質を異にする、生命の自己延長の働である。

生命の自己延長の働は、人間が事業そのものに同化する。心と働とが常に離れず  
に一致して行く。爲すこと悉く可ならざるなき道が踏める。

その生命の自己延長の働は、例へば偉人の靈が後世の人に働くやうに、如何なる  
田夫野郎をも、心膽を寒からしめて、必死の覺悟を起させる力がある。岡谷の片倉  
の製絲工場などは、何の力であのやうに成功して行くかといへば、決して頭や腕や  
慾や策の力ではない。生命の自己延長の眞剣な人間の靈的働である。

地方的に産業の統一を敢行するは、地方にこの生命の自己延長の靈的働を起さす  
のが主眼である。

かういへば、何所にでもそんな働が起るものかど一笑に附す人があるであらう。  
それならば、何所にでも情死沙汰はあるではないかと、お答へする。地方の人間が

統一された産業に向つて、必死の覺悟で行きさへすれば、必ずそこに生命の自己延  
長の靈的働が發揮する。デンマークはそれより外にはないのである。

人は、疑ふこと、そのことが、凡ての失敗の本である。石に立つ矢の諺を思へば  
その間の呼吸が呑み込める。學者、官人、金貸、かういふ商賣の人間は、疑惑の間  
屋である。これらの人間の働に依つて、生命の自己延長の靈的働が、地方的にも或  
は又全國的にも起りやう道理はない。

## 第二節 地方的自然と歴史

産業の地方的統一は、勿論人を主とする。所が、その人は、土地の自然と歴史との  
産である。隨て、人を知るには、土地の自然と歴史とを知ることが肝要である。

例へば、東北地方を視察すれば、東北地方の人間は、一概に東北は天恵に乏しい  
といふ。同時に又彼等は、東北は政府から継子扱ひされたといふ。



さういふ東北を親しく見れば、東北人のいふ通りでは決してない。

東北は昔から地方に割據して一天地を構へ、日本全國を向ふに廻して、怖れさす丈けの力があつた。天恵に乏しくて何うしてそれが出来やうか。けれども東北は安倍氏でも藤原氏でも、逸事や遺跡の物語るやうに、京都の美人を三千人も飼ひ、或は京都の名工に金堂を建てさせなどして、天下の羨望の的となつた。その有様は、まるで珊瑚蟲式の生活振である。綺麗に構へてはをるものゝ、根が移動的活動的でない。坐食本位の生活が東北地方には附物であつた。

そのためであらう、東北は何時も、西南からの勢力で征伐されて亡びてしまう。仙臺の伊達政宗にしてもさうである。あれ丈けの氣力の男で、米澤を出て、仙臺に入つて、羅馬へ使を出したりなどしながら、自分はといへば、天子のために玉座まで造つて、東北の天地に蟠つてしまつた。その獨眼龍の末はといへば、仙臺藩六十二萬石の格式で百萬石以上の實收に腹鼓を打ち、妻妾子女等は、朝からごふろく機

嫌で、顔に紅葉をさせてゐた。お家騒動では恐らく天下一、幕末維新には、東北の盟主と仰がれて、佐幕の旗を持つて、官軍に對抗し、丸一發放たすに、脆くも、城下の誓をした。獨眼龍は、我が意を得たりと、地下に笑つてゐるであらう。仙臺の青葉城趾を一目見れば分るやうに、獨眼龍には戰意はない。太平の下に築いた彼の城は、まるで頭ばかりの造り龍の型である。

東北の歴史は、蟠居的、活きた龍さへ、頭ばかりで、胴と尻尾は化石同様、振ふ活氣のないやうな跡を示めす。

東北をかくなす根本の原因はといへば、それは自然の厚き恵みの力である。東北の自然を見れば、阿武隈川の平地、北上川の平地、最上川の平地、この三つの平地丈けでも、米の産地として、昔から天下に雄を唱へる力があつた。それが東北を坐食させ、龍を化石に變じた本である。

米作といへば、春末から秋にかけての仕事、その間は雪はない。雪の合間に働い



て、雪の季節は炬燵酒、東北で金持といへば、酒屋に限つてをるのを見ても、その間の消息が分る。尤も今では金貸が一番の金持だが、それといふのも、炬燵酒の取持である。

さうした東北に、維新後薩長の政策的魔薬が投せられた。それは何かといへば、大久保木戸の献策にかゝる、東北の人心緩和劑である。その藥劑は、言ふまでもなく、天下公知の龍駕東遷であつた。

この人心緩和劑に依つて、東北人は政治的中毒の反應作用を惹起した。今日の東北は政治的半狂である。支那人は英人のため阿片で神経を麻痺され、亞米利加印度人は白人のために火酒で血を破壊された。東北人のためには、薩長の投じた政治的人心緩和の政策は、明かに阿片、火酒の効目があつた。

東北は政黨の首領株は勿論、總理大臣を初め内閣の閣員を數多く出した。その他宮内省向の大臣から、陸海軍方面の大將株まで、東北人の肩書は少なくない。東北

人の鼻高々な誇は、確に政治方面に、目に付き易い。

けれども東北は、一人の政黨の首領株若くは内閣の閣員を製造し出すには、東北の社會を本位として、時と金とが何れ丈かゝつてをるか、それは又確に想像以上であらう。

その東北の社會を、詳に實地に就いて視察すれば、先づ第一に目に着くのは、金利の高いことである。一二の例ではあるが、その極端なものを擧げて見る。

會津若松は音に聞えた松平家の居城、戊辰の役に官軍と戦つて、今では神にも祭られさうな白虎隊の出生地だ。その若津は會津塗といふ漆器が名物で、土地の特産として、舊會津土着の人間の生業の本ともいひ得やう。

その漆器の製造を實地に見て、何に喫驚するかといへば、第一に腐つた木材の材料、第二に職工の貧弱な働である。何うしてかやうな大藩の跡の名物が、かやうな仕事をしてをるのかと質してみれば、漆器の木の製造人が、資金として使ふ金の



利息は、日歩六錢であるといふ。成程之では良い木材の材料を長く寝かして使ふ譯には行かぬ筈だ。會津若松はこの通りである。それが單に名物の漆器丈けに止まればまだしもであらうが、若松全市の社會組織の本地にも何うやらそんな、腐つた材料が使はれて行くやうに取れる。

又舊仙臺藩内で、音に名高い仙臺萩の伊達安藝の居城であつた涌谷地方は、現在、縣の獎勵にかゝる乾満倉庫の第一の試験地である。その場所を實地に視れば、成程その地方は産滿量が多い。さうしてその附近は又齋藤善右衛門といふ千萬長者を初めとして多額納税者は柵で量るほどあるといふ。皆金貸しで長者となつた格である。その地方の滿市場に行つて、取引關係の人間はと見れば、仲々大きな仲買がある。製絲業者の手先仲買でなくて、思惑的な獨立した仲買だ。それらの數が少なくない。さうしてそれらの思惑師の使ふ資金の利子はと聞けば、日歩七錢位は珍しくないといふ。如何に、この地方が、經濟上波瀾激しいかと想像される。隨て又浮沈も多く

なければならぬ道理である。

以上を總括して見れば、東北は自然に恵まれてをらぬ譯はない。たゞ四季の時の自然に、按排宜しきを得ぬのは、人の和の缺くるがためである。又東北は歴史的に見て、決して一概に糶子扱ひされてはをらぬ。だが餘りに多く政治的の飴を嘗め過ぎ、習慣の炬燵酒に酔ひ過ぎて、自己を失ふてをるのは争へぬ事實である。その反動は、經濟的生活に、厭でも脅威壓迫が來ねばならぬ。それを自然の力に歸し、又糶子扱ひに取るといふのは、東北人の無理である。

### 第三節 産業的日本の脊椎

日本を通じて、産業の中樞と見るべきものを求むれば、米と生絲との二つを擧げねばならぬ。米は國民の糧として、直接血の補給に消費され、生絲は輸出貿易品として、金に化せられて、間接國民の血の保全に役立つてをる。



日本が世界的經濟組織の内に編み込まれて、生活上、有無交換の大なる單位の一員たる以上は、以上の米と生絲との二の中、何れを國民的經濟上、比較的多く價值附くべきかといへば、米よりは寧ろ生絲に重きを置かるべき必要を見出す。

米は日本社會の立場からいへば、商品として取扱ふには、餘りにその性質が貴重過ぎる。喩えていへば、人間の勞働は、人道上から見ても、商品とするのは餘りに貴重過ぎるといふ見地から、國際勞働會議に於ても、勞働の非商品主義を取つた。

この意味から見て、日本の米は國民の現状から推して、人間の勞働視さるべき所がある。勞働は人間から切り放てぬ所に、商品とするは餘りに貴重過ぎるのである。日本國民に取つての米が、その通りといひ得やう。その見地から、日本の産業に於ける中樞的產物の中で、經濟上比較的重く米よりは生絲を見るが至當と取れる。

米は國家が、生産的本位としてよりは、寧ろ消費的本位の見地から、現在、國立倉庫を、日本全國を標準として、要所々々に建設してをる。さうして收穫過剰で米

價の低下しさうな時期には、買上げて貯藏する。その目的は主として米價の調節である。收穫過剰の際には米作者を助ける意味になる。それは米作者が、消費者の立場に立つて、不利の位置に陥る惧があるからだ。

又凶作で收穫不足の際は、國家は、勿論、貯藏米を賣出して、高騰する惧のある米價を調節する。今度は米作者以外の消費者を助ける意味になる。かくして、日本國民の貴重なる生命の糧から生ずる、生活上の脅威不安が按排される。大正七年の米騒動の苦い經驗が、日本にこの道を發見させたのである。言はゞ一種の舊藩時代の踏襲である。舊藩時代には各藩備荒米の貯藏があつた。經濟本位といふよりは、寧ろ藩の自衛が主たる目的であつた。

現在日本の農業地方を視察するに、自作農でも、小作農でも、米は假に喰ふだけ取れ、副食物の野菜も作れ、薪木も山から切り出せるといふ、自給自足の生活要素が、可なり好く備はつてをる場合でも、普通の場合、現金の収入が五六百圓は一年



に必要なと見られる。

その金の費途はといへば、税金、教育費、佛事祭事費、醫藥費、被服費、履物費、副食費、味噌、醤油、鹽等の必需品費、それから又、酒、煙草、菓子等の嗜好品の費用が主である。

普通農家に就いて話してみれば、家の内情は經濟上でも稼業上でも容易に實を語らぬ。といふ主たる理由は、所謂納めものが怖い。税金は農家の鬼門である。その癖、話の中に、酒丈けは裸になつても飲まずにはをれぬといふ。さうして、毎晩少なくとも徳利一本は倒す。一升八十錢から一圓位な酒である。

佛事祭事が費用を喰ふ。お寺の坊主が、何か彼か、事にかこつけて、布施取りに廻る。村の氏神や、いろいろな神様の宮や社や石垣の修繕費取りが廻つて来る。皆金だ。併し一番困るのは、家に病人の起つた場合の醫者迎ひの費用だ。一里もある町から呼べば、一回何うしても十圓ものだ。自轉車で、も飛んで来て呉れれば、さ

うは費用はかゝらぬのに、往復の車代がかゝる。併し幾らかゝつても、家族の生命には替へられぬ。

普通農家には何うしても現金が無くてはすまされぬ。その現金一ケ年五六百圓を何うして工夫し出すかといへば、それは農家副業の第一として認められる養蠶である。

養蠶は現在普通春夏秋三回飼ひである。勿論地方の自然に依つて米作、若くは煙草栽培との關係から、春夏二回、或は春一回の飼育に止むる所もある。併し概して三回飼育と見て差支ない。三回で七八十貫匁の生繭を作り出せば、普通の繭の相場ならば、裕に一ケ年の現金支出の用途に充てること出来る。

若し家に十分の畑がなくて、養蠶の出來ぬ農家は何うするかといへば、その場合はいろいろあらうが、若し手蔓に製絲工場が見出されるれば、小學卒業後の娘はその方へ出して稼がせる。相當の腕と頭とありさへすれば、工女一人で、賄は工場持ち



で、年に二百圓見當の稼ぎはする。

製絲の本場である信州地方は、一ケ年の中、約三ヶ月は工場を休んで、工女を里へ歸すが習慣である。併し東北地方は同じ雪國でも、普通製絲工場は年中挽き通すが習慣だ。之で見れば、寒さは別段、製絲工業を絶対に阻礙するものとは取れぬ。

要するに、日本の現状に照らして言へば、養蠶製絲は、日本の社會生活を本位として、重要な關係あることが意識される。少なくとも、金を中心としての今日の農家生活は、土地の所有主と否とに關らず、養蠶と製絲との二つの業に負ふ所が重大である。

若し假に現在の日本社會から養蠶製絲業を取除いたと假定したならば、日本社會は確に無脊椎動物の姿と化してしまふ觀がある。

それ故に國家としては、この重大な關係を一般社會の基礎に持つ、養蠶製絲業に對しては、深い考慮を費して、單なる政府の官權者流の指導の力に任せぬことが、

絶対に必要視される。

事實、養蠶製絲業は、その目標が金唯一つである。社會の立場からいへば、金が貴重であるだけに、その反應の働を過つ場合は、怖ろしい危害を社會に受けるのである。

例へば、養蠶の盛んな土地と養蠶の無い土地とを比較するに、養蠶地は金廻りが好い。さうしてそれだけ金の融通のつく道が開けてをる。所謂入金制度などいつて次期の産繭を當てに、金の貸借が行はれる。その結果宮城縣下の本吉郡の一村の如きは、養蠶家丈けの負債が四萬圓以上に嵩んで、年二割の利子で苦められてをるといふ。さういふ事實に較ぶれば、養蠶はせず、纏つた金は一時に取れる見込みのない仕事でも、一箇年の時を標準に一家の勞力の分配が適宜な方が却て幸福である。併し之は制度の罪、指導監督の宜きを得ぬ誤れる結果である。

今一つ、製絲工場の現状に見る如き、多數の工女を收容する寄宿舎制度に於ては



見違すことの出来ぬ事柄がある。それも決して製絲業の直接の結果とは取れぬ。けれども金を唯一の目標とする仕事の及ぼす、反響的結果と見做す必要がある。さらばそれは何かといへば、傳染性の悪疾である。工場醫は知らぬ。知つても公にせぬのであらう。競争場裡に立つ工場のための大なる痛手であるからだ。病氣の性質は呼吸器と生殖器との二方面に跨がつてをる。

多くの寄宿舎收容の工女は、農村將來の母性である。國家はその母性に、日本の産業的脊椎を通じて、憂ふべき悪疾を惹起させてをる。何が故かといへば、一つは多量生産主義の舊式工場組織、一つは金利の高率、この二つのためであると斷言出来る。

#### 第四節 産業的日本の二大重鎮

日本の九州と東北とは、歴史上から見ても、不思議な因縁がある。日本の統一を

行ふ上に、必要な力の起つた場所は、九州であつた。第一は神武天皇、第二は足利尊氏、第三は西郷南洲、以上三者の名が、時代の代表である。その三つの代表以外に、日本の眞の統一はない。織田、豊臣、徳川は足利の義足であつた。九州は日本統一に至大な關係を有つ。

所が、統一された日本を平和に維持して、社會の秩序を保つ力は東北にあつた。頼朝が覇府を鎌倉に開いたのも、徳川が江戸に幕府を置いたのも、明治維新後東京を帝都と定めたのも、皆東北に重きを置いて、言はゞ天秤の分銅の如く東北を見たからである。

九州と東北とは、見様に依つては、全く天秤の皿と分銅との觀がある。天秤の皿と分銅とは、天秤の支點を標準として、その重さが全く相同じくなければならぬ。九州と東北とは、日本の生命の中心を起點として、確に同じ重味を有つ。日本の生命を支配する天秤に相當するものに二つの有形的な組織がある。一つは産業、他の



一つは國防である。試にその一つの産業方面に就いて述べて見る。

九州に歩を入るれば、土地の農村は米作と養蠶とに主力を注ぐ。さうして製絲工業は、極めて一部の地方の外、他は凡て信州系統及び丹波系統である。

東北に来て見れば何うかといへば、矢張土地の農村は、米作と養蠶本位で、製絲工業は、信州系統と丹波系統、土地の製絲家の經營にかゝる分は極めて一部に過ぎぬ。

その養蠶製絲を標準として、九州と東北とを比較してみれば、九州の方は東北よりは、養蠶家の組合組織が整ふて、製絲家との間の連絡歩調がよく取れてをる。

殊に薩州の如きは、製絲業經營に縣是株式會社の組織に手を焼いて、片倉の手に一任して、養蠶家と製絲家との間の連絡關係を密にする方に努力してをる。

東北方面では、養蠶家の組合さへ、好く成立つてをらぬ。可なり好成绩を擧げてをる組合でも、まだ製絲家との間の連絡は整はぬ。

地方に依つては、組合製絲を縣で奨勵して造らせて、全然失敗に終つてをるのに新たに養蠶家と製絲家との間の連絡を附けやうとせぬ。さうして今盛に乾繭倉庫、繭市場を、産業組合組織若くは株式組織の下に、縣の奨勵で造りかけてをる。凡てが破壊的な結果を豫想させる種子としか取れぬ。

かうして九州と東北とを、蠶絲業方面のみに限つて見れば、九州は組織的に一つの強力な中心に向つて統一される態度が見える。之に反して東北はその強力な中心から個々に分離して行く態度を示す。九州と東北とは、等しい産業の重味を以て、その態度に全く正反對な現象を示す。眞に不思議な現象である。

思へば、九州と東北とは、物に對する感情が、互に異なる性質のやうである。九州は動いて物を取る感情に強く、東北は坐して物を取る感情に富んでをる。隨て九州の人間は、共同的に事に當る性質が、東北人に比較すれば優つてをる。併し東北人が、頑強に事に當つて、倦まぬ力は九州人には少い。



九州は明治維新から十年の西南役にかけて非常な損害を受けた。維新に努めた薩州の如きは、一面から見れば、まるでギリシヤのスパルタのやうに、國家に對する功勞から、日本を凌駕する勢威を發揮したのであるが、そのおりの薩州の土地は、非常な犠牲をそれがために費して、内は實際經濟的には悲哀である。

今日でも、日向大隅薩摩といへば、關西出稼の女工の本場に數へられてをる。薩摩は以前女郎の本場であつた。それだけ經濟的生活の脅威が烈しい。

その薩摩の兵隊に、戊辰の役に散々苦しめられ、土地の文物、自然の山野も、悉く見る影もなく破壊された東北の盟主であつた仙臺藩は、今日宮城縣の名の下に、矢張地方に女工及び遊女の出稼を多く出す。一般に東北は、明治維新の打撃のために、經濟的生活の脅威が烈しくなつた。

この點から、九州と東北とを對象して見れば、相反する維新の勝者と敗者との立場に立つて、さうして互に相等しい經濟的生活の窮地に陥つてをる。日本の生命を

本位として、皿と分銅との關係を保つ九州と東北とは、その位置が産業的方面から見ても、相似寄つた境遇である以上、經濟産業方面に於て、相一致する新たな道が發見されさうなものである。

### 第五節 太平洋問題の刺戟

日本の蠶絲業を維持して、日本社會の生活を、金本位に緩和して行く道はといへば、日米關係の平和的維持の外はない。それには太平洋に隙のないやう、共に綿密な注意を要する。

この點から日本を視れば、日本の海が問題となる。日本は第一、陸に於ける人口を、海に吐き出す必要のあるのは當然であるが、第二に陸にある人口に喰はす食糧が又問題である。この二つの問題を解決する手近な道として、日本の考に浮ぶのは、遠洋漁業問題である。所がこの問題は、經濟上の問題としては、今日まで解く道が



なかつたやうである。

所が諸種の周囲の環境の變化から、この問題に解決の道が、臆氣に見えかけて來た。その最も大なる刺戟を與へるのは、太平洋問題である。

日本は歐洲大戰後、國防策を一變した。持久戰の包圍を受けて、國を死守する覺悟を附けた。その結果として、太平洋上の日本漁船の改造に本づく、漁船艦隊の組織が案出された。

一口にいへば、この漁船艦隊の組織は、海上に於ける國防と經濟との調和である。その調和を如何に按排するかは別問題として、それに關して、第一に考慮さるべき點は、平素に於ける漁船艦隊の運用である。

その運用は、二つの必要な條件が備はらねばならぬ。一つは優越な漁場、他の一つは優越な漁港である。

この二つの條件を充たすに足るべき自然の場所を日本の太平洋沿岸に求むる場合

は、先づ指を九州の日隅薩、並に東北の三陸沿岸に染める。

九州では薩摩沖を中心として、南は臺灣、北は紀州沖まで、鯉、鮪その他の漁に従事される。さうして漁港としては、幾んど理想的な自然の良灣が、好みに應じて求められる。

東北の方はといへば、東北は名高い金華沖の漁場が控へ、南は土州、紀州を初め東海道沿岸の漁船を中堅として、關東沿岸の漁船が集まつて來る。主として黒潮に浮游して北行する、鯉の漁業である。

現在その漁船の大きさは、静岡縣焼津地方の所屬船を最大として鐵製二百噸型にまで達してをる。乗組員は一隻百三十八位である。

三陸沿岸地方は、主として定置漁業に重きを置いた風がある。鯉漁業並に鯉節の製造方法等も、静岡地方の教師を雇ふて、今尙ほ改良期を脱せずをる有様である。隨て三陸沿岸の漁船は、普通未だ木造の不登簿船型に止まつてをる。けれども船



主等の漁業に對する企業心は、決して侮れぬものがある。併しながら、その方面に於ても、尙ほ東北人の特性たる排他的な自己本位の態度を失はぬ。

東北の現在の漁業状態は、漸く静岡地方の漁業の競争に刺戟されて、目が醒めかけてをるやうな姿である。自己保存の念の強い東北人は、全く岩に固着する鮑か榮螺式に、周圍の環境の變化には、ほとんど無頓着であるやうに取れる。

その東北人の棲む、太平洋沿岸は、太平洋問題を中心として、大なる注意の拂はるべき價值がある。それといふのは、自然の良灣が如何なる巨艦をも、自由に抱擁するに適してをるからである。

以上の如く、海上方面の漁船を本位として、國防と經濟との調和の問題を考へ來れば、ますく九州と東北との似寄つた重味が發見されて來る。

東北と九州とは、陸海共に、相寄つて、共同の經濟産業方面の問題を攻究する必要がある。それには中間に立つ政府が、國防上の重大なる關係から、橋を渡して、

兩者を結び附けるが良策であらう。

今一つ國防と經濟との調和に於て、九州と東北とを近附けるものは、例の製鐵事業である、東北には釜石を初め、岩手縣下には鐵鑛が自然に恵まれてある。普通の製鐵の方法に依つて、石炭は北海道から招いてをる。

九州はといへば、逆に鐵鑛を支那から仰いで、石炭を自給してをる。この九州の製鐵事業は、平和を本位に經營の道が辿られてある。それは恰度日本の生絲の格で平和が破るれば、その事業の運命は、何う變するか豫測出來ぬ。

隨て日本國民の立場からいへば、少なくとも太平洋問題を本位として、絶対に平和に隙を與へぬやうな注意が要る。

それには、海上の國防と經濟との調和を第一として、日本産業界から見た二大重鎮たる、九州と東北との一致結合を策る必要がある。



## 第六節 産業的社會の中心

日本の産業社會は、言はず全くの亂世である。産業的に言へば、社會に組織もなければ、又隨てその中心も認められぬ。若し日本に民族生活の立場から、産業組織の發達の必要を認むる神あらば、古の我が日本の例に倣ふて、皇子に嚴命が下るであらうと想像される。

日本民族の古の物語には、皇子が九州の熊襲を平げ、又東夷の亂を征された事柄がある。爾來日本皇室の諸皇子は、時勢の推移に伴ふて、それ／＼時代の勢力を代表する、社會の中心となられた觀がある。

例へば、宗教の盛時には佛門に籍を入れ、武力の盛時には軍籍に名を列ねられた。現在でも尙その事實を認むることが可能である。國民一般之を認めて、少しも異とせず、却て敬意を拂つてをる。

それといふのは皇子のために、時代に必要な社會の勢力が、刺戟増進されることを固く信じてをるからである。事實、地方の片田舎へでも、一度皇子の歩が向けば道もなかつたやうな片田舎に、立ちに立派な道路が開けて行く。萬事がその通りである。

それで、日本現在の産業社會に於ても、その中心に皇子を戴いて、この亂れた社會の秩序を回復する、新たな道を開きたく思ふ。恐らく之は、日本民族の意を汲む神の眞意であらう。

少なくとも、九州と東北とを、産業的に結合する意味に於て、兩所に各一つの産業的鎮守府の設備が欲しい。

皇子は政府を代表される官權者ではない。皇子は、日本民族を本位としての、大なる家族の資格に於て、社會組織の中心となられるのである。それは何れから見ても、何の不都合もないであらう。



皇子を日本政府の官権者が戴いて、社會組織の民族的至情から遠けるのは、全く皇子を民族から奪ふのである。

若し日本民族の血を本位として、民族的自由の觀念に訴へるならば、日本民族は失はれたる自由の回復として、皇子を官権者の手より奪ひ返すの舉に出づるのが至當である。

でなければ、日本社會の組織には、少なくとも産業的に、秩序は回復されず、又中心は見出されぬ。若しかくして日本の皇子が、帝都を離れて、地方の産業的社會組織の中心とならるゝならば、所謂皇室の藩屏として、從來帝都に群集してをる、昔の舊藩諸大名の華族の人々も、家を擧げて、地方の産業的社會組織の中に織込まれるであらう。

恐らく之が明治維新の大理想を實行する、本當の日本國民の第一歩であらう。

明治維新は四民平等を標榜した。さうして、その標榜にも關らず、諸大名に東京

居住を餘儀なくした。それは皇室の藩屏たる名目と、國家保證の公債に本づく利喰生活とのためである。

昔徳川幕府に妻子を江戸に質とされてゐた諸大名は、新たに自身虜とされてしまつた形である。維新の四民平等の意は、奴隸解放に等しい意である。所が安ぞ知らん、大名華族の名に依つて、大名は奴隸と化した姿ではないか。薩長の奇智は到れり盡せりの感がある。

若し日本の大名華族に、金利の羈絆に囚はれず、大義に本づいて、維新の宏謀を翼賛し、眞に皇室の藩屏たる誠あるものあるならば、今日の社會的狀態を見るまでもなく、民族としての國土の上に、一片の涙を注がねばならぬ道理である。

三百年間、治に慣れ、利に活き、妻子を質に取られても、人間としての血の湧かなかつた大名は、矢張、今日華族としても、血は自由を知らぬ奴隸の血であるのであらうか。彼等の態度はそれを疑はせる。



併しながら、日本の社會は、産業的に目醒むる以上、社會に一人の奴隸をも認むることは絶対に出來ぬ。産業的社會は、決して物質的若くは經濟的社會ではない。それは全く人間自由の社會である。

若し日本民族の血の中心が、眞に自己を發見して、日本民族固有の祖宗の靈を己に見出すであらうならば、日本社會を産業的に組織して、民族の心に自由を回復することを努めねばならぬ。

新たな元號は昭和として調和の意を示す。日本が現在産業的に、社會に調和を求むるのは、決して工場内の勞資などの間でない。それは日本の兩端に於て、明治維新が強弱の位置に置いた、廣義の意味の勞資間である。

九州は取り方次第で、維新を標準に考ふれば、全く雇主の觀があらう。又確に東北は、官軍の馬蹄に蹂躪されて、婢僕の觀を呈したであらう。併し九州と東北との關係は、そんな些々たる事柄よりは、日本民族の自由の上から達觀して、より遙、

偉大な問題に遭遇してをる。

この意味に於て、日本は産業的方面の必要から、この亂れたる社會の秩序回復のため、日本の皇子に古の皇子を復活させたい。恐らく神意もこゝにあるであらう。

### 第七節 産業組織の靈肉一致

現在社會は産業に活きる。その社會なるものゝ本體は、一身の主である。さうしてその社會の實在は一身の内である。

若し社會を眞に發見するものは、釋迦の極樂、基督の天國を發見したと同一事に歸する。極樂は一身の内存し、天國も亦一身の内に見出せる。佛といひ、神といひ、皆一身の主の外にはない。その主は即ち無限の世界に存する靈である。

從來、世間の人間は、靈肉の差別對象の觀念に依つて、囚へられて來た。世人の無自覺即ち愚は、この靈肉差別の觀念が本である。



靈肉を差別した觀念には自由は活きぬ。一身の主はその差別に依つて消滅するのである。けれども、この差別の觀念は、單に宗教の一方にのみ働かずに、政治的方面にも働いた。その方面では主従の差別觀念と化した。

又その差別觀念は社會的方面にも働いた。社會的には、一家の親子の差別觀念を生じた。親子は時を標準とすれば一體である。縱令又親子が分離した體であつても、血を標準とし、生命の自己延長の働から言へば、差別は成立たぬ。眞の人間社會は時に見出せる。且つその働は生命の自己延長である。

從來、少なくとも、專制的に支配されて來た日本の民族は、宗教でも、政治でも、教育でも、一身の主を消滅して、個人の自由を没却し、社會を奴隸化する方にのみ導かれてゐた。何うして、そんな馬鹿な眞似をさせられ、又自身にも、何うして、そんな馬鹿な眞似をして來たのかといへば、それは頭のあるものが、頭のないものを、餌にして喰ふに都合がよかつたからだ。又頭のないものは、何うして餌になる

やうな馬鹿な眞似をしたかといへば、靈肉の差別觀念に囚はれてしまつたからである。言ひ換ふれば、一身の主の觀念を奪はれ、自由の精神を滅却すれば、人間は立ろに奴隸化し、頭のある人間の餌と化して馬鹿を見る。

專制が社會を毒するのはこのためである。專制國は人喰國である。專制的人民は人喰人種であるとして差支ない。從來の日本は正にさうであつた。

日本は今新たに産業立國の看板を表面にかけ初めた。それはこれまで專制政治國であつたこと、人喰人種國であつたことの裏書である。過去は咎めぬ。進んで自由の國ならば、祖宗へ對する面目は立つ。

所が、産業國として立たんとする日本は、西洋に囚はれてをる。西洋の産業なるものは、勞資を差別して、今日そのために社會に大なる悩みを與へてをる。日本もそれに感染して、自己破壊を行ふてをるのは事實である。

一體産業方面の勞資の差別は、舊い社會の專制に囚はれた、靈肉の差別觀念その



もの、延長である。西洋の産業組織には、その靈肉差別觀念の專制的遺傳が、濃厚に認められる。さうして、英國の如きは、政治的方面に現はれた舊い差別觀念を遺傳して、産業組織を立憲化して、労働者階級が、工場の直接管理權を握ることに傾いてをる。又米國では何うかといへば、宗教方面に現はれた舊い差別觀念を遺傳して、産業組織に、労働者階級が物質的所有主たらんと欲してをる。工場を例とすれば、労働者とその工場を共同所有にする行方である。英米共に産業組織の進化には相違ない。併しその進化が、舊い專制的差別的觀念に本づく遺傳から、脱してをらぬのは争への事實である。

元來、大なる人間社會の有機的組織體から見れば、今日産業組織に要する勞資の働は、明かに靈肉の働に相當する。分つて分つべからざる性質のものである。それを分かつては、社會を毒し、又分たねば、働の分化を鈍くする。

その間の關係は、恰度一つの組織の中で、分業が一面には是非必要で、分業を行

へば、そのため却て分裂を來たし、立ろに統一の必要を感じて、今度は統一の一方に向へば、分業が潰されて、組織の働が鈍くなつてしまふ、かういふ事柄そのまゝである。

分業は、分業丈りで、統一と差別されては成立たぬ。又等しく統一は、統一丈りで、分業と差別されては成立たぬ。分業と統一とは、一つの組織の両面である。さうしてそれは、單に形式的には差別對象されて取れる。併しそれは靜止の状態に限るのである。

有機的組織は生命ある活動體である。靜止觀念のみを以て、之を取扱ふは死の状態を假想するのである。活きた有機體には當筈らぬ。靈肉差別も亦死の假想から發した觀念である。今日の産業的社會の勞資の差別觀念も、亦等しく、社會的死的假想觀念と見ることが出来る。

若し一切の有機的活組織が、生死一致の必然のものとするれば、靈肉は差別無差別



一致が當然であるであらう。

産業組織は、人間社會に、生命の自由を贏ち得る使命を有つ。その使命を果たす唯一の目標は、靈肉一致觀念である。その觀念に依つて、專制を棄て、自由への道が迎れる。言ひ換ふれば、死から生への道に就くことが出来るのである。

專制は死である。自由は生である。專制は地獄。自由は極樂。專制はヘル。自由はパラダイス。社會はその自由を求むる。それを與へる世界が、産業的國家の内部の世界である。

## 第八節 産業社會の物質的寺院

日本國中、市といふ市の中に歩を入れて、一番目に着く建物は何かといへば、銀行のそれである。一見して銀行なるものが、時代勢力の中心であることが分る。その銀行の中心人物たる頭取の位置の人はといへば、大抵土地の屈指の物持である。

銀行の仕事の内幕は分らぬ。併し表面の仕事は、一方に預金を取込んで、他の一方に貸出しをする。之で見れば、銀行といふ所の仕事は、人の揮で角力を取る、損の行かぬ、都合の可い仕事に取れる。産業界の物質的寺院として、安全な生の道を計る人間の城廓である。

所が銀行の中には、人の揮で角力を取る式の道を踏まずに、人の金で、賭博場の親寺式の道を取る銀行がある。思ひ切つた行方だ。

この賭場の親寺式の行方は、今日の銀行としては、型に箝つてをるか何うかは別として、場合に依つては極めて必要な行方であるに相違ない。例へば蠶絲業、若くは漁業等の如き、現在の事實から推して、まるで賭場の賽式に、何時目が出るか、見當が附かず、全くの投機の性質を免れぬ事業には、この親寺式の銀行が必要である。

蠶絲業及び漁業は、日本の現状では、産業中の王及び王妃である。何を犠牲とし



ても、この二大中心は失はれぬ。殊に二つは如何に烈しい投機性を有してゐても、五年に一回、若くは十年に一回は大目を出す。

一體に親寺式の銀行は、専制的な死を標準として成立たねばならぬ。若し型ばかりが親寺式で、その實は人の輝で角方式では、墓場の死人の肝賣式に見える。普通銀行の産業本位の營業看板は、何だかその邊の臭がする。

何うして銀行は、あゝした立派な構の建物が要るのかといへば、あれは田舎の人間の信用を引くためだといふ。恰度お寺が、矢張構を立派にせねば、佛に價値が薄く、衆生の信仰が乘らぬと一様である。

元來銀行に預ける社會の金といふものは、皆民衆的努力の蓄積である。金は物資の交換の媒介とのみ考へてゐては當らぬ。銀行に預ける金の性質は、悉く努力の蓄積である。隨て銀行の預金は一般的にいへば、社會的普通の信用の本である。

所がその社會的信用の本を、詳細に解剖してみれば、社會的普通の個の不安であ

る。何うしてさう取れるかといふに、働いて本當に得た社會の個人が、銀行にその金を預ける。銀行から一冊の預金通帳を渡して呉れはしたものの、果してその金が確に拂戻されるか心配になる。それが不安だ。

所が幸に政府の監督があつて、そんな不安のないやうに、安心させて呉れる。それで銀行の預金といふものは、預け主から見ても確實なものと思へる。

それで普通、銀行の預金を本位として言へば、社會の普遍的信用は、社會の普遍的不安に對する國家主權の保障といひ得る。大切なのは國家主權の不動である。

銀行は明かに、喩えていへば、神を戴いて社會衆生の信仰を集め、天國往生を案内する、舊式な寺院である。

所が銀行は、預金の一方丈けでは商賣にならぬ。その預金の貸出しをして、利廻しせねば、預金の利息に、銀行が喰潰される。

普通銀行の貸出しといふ仕事は、社會の個人を本位として、銀行に信用を造るこ



とである。それで金の引出しといふは、結局信用の引出しを意味する。銀行紙幣なるものは、その場合の信用手形である。

この手形を持ちさへすれば、この世の中では、極樂がきめ込める。全く銀行はその意味から言つて、物質的寺院といひ得る。

さればその信用手形の引出主は、一體その手形を何う使用するかといふに、それには種々な道があらう。到底その限りない道を詮儀立てすることは、銀行の力には及ぶまい。それで銀行の方では、相手に信用を與へるのだ。

所でその信用が極めて危険なものである。若し假にその信用が濫用されて、人肉賣買の道に使はるれば、社會のためには不幸であらう。若し又それが、惡辣非道な雇主のため、多數可憐な女子供の酷使の道に役立つならば、人道のために悲しむべき事柄であらう。若し又その信用が外國製の養澤品の輸入に使はれ、社會の素質を惡化するに役立つならば、國家のための憂であらう。

銀行の與へる信用なるものは、一口にいへば不可思議な性質を有つ。それは形は一片の紙片である。名は金と稱へられ、その性質は信用手形だ。それが社會に現はれては、佛ともなり、魔ともなる。

全く銀行はこの意味から見て、生殺與奪の力のある、佛魔兩性の靈を宿す寺院である。

現代産業本位の營業を司る銀行は、表面の仕事として、預金貸出を標榜する。その預金の信用と貸出の信用との間には、まるで極樂と地獄、神と鬼との差別を生ずる危道あることが窺はれる。この危道は、人間自然の生死の間の危道そのものと考へられやう。銀行經營の任に當る中心人物は、單なる物持丈の資格では物足らぬ。一段進んだ人生の極意に達して、初めて現代産業組織の寺院の頭取たる資格がある。



## 第九節 産業組織の二面の働

日本の産業界では、三井三菱が二大横綱で、全国に亘つて、兩者の勢力は認められる。さうして普通の個人的若くは株式會社的な事業は別として、苟も廣く社會並に國家全體に關係ある性質の事業となれば、三井か或は三菱かの手にかゝらねば、納まりが着かぬといふ勢である。

一つの言はゞ表面小さな例ではあるが、兩者の事業で、産業組織の社會に對する二面の働を對象的に示して呉れる實例がある。

岩手縣下に釜石礦業所と呼ぶ、製鐵所がある。最初政府で着手して、後ち田中組が經營し、現在では専ら三井の手に引取つてをる。場所は釜石港で、目下鑛石は釜石附近の鑛山が採掘する量と、支那から取る量と半々使つてをる。

仕事の種類は、目下製鐵、鐵管鑄造、棒形製鋼等である。田中組が經營に持ちあ

ぐんだのを、三井が引取つて、經營して見て、見込みがあるので、目下内容の改造整理を實行してをる。

資本の力、經營當事者の力、周圍の信用の力、三拍子揃ふて來たお蔭で、この新たな復活氣分が湧き出て來たものに相違ない。

所がこゝに一つの認むべき現象がある。かく復活した釜石鑛業所が、釜石町民の立場から見て、以前の田中組の時代に較べて、冷かに見られ出して來た。確に一つの異現象と取れる。

この異現象の起る原因は何にあるかといふに、三井經營の釜石鑛業所は、釜石町とは別社會の觀を呈して來たことである。その意味を一步進めて詳しくいへば、鑛業所の生きる道と、釜石町民の生きる道とが、離れて別々になつたといふことである。

何うしてさういふ風になつたかといふに、鑛業所が三井の手に移つてからは、内部の組織を一變して、一口にいへば三井式に改めた。金を本位に、工場の經營費を



緊縮した譯である。

工場の事業の主要な取引關係は、東京の本部で取扱はれる。鑛業所は使傭人格の支配人、技師長が主となつて管理して行く。鑛業所の實際取扱ふ金といへば、月給日給の使傭人への金の外、目立つ金はない。

所がその金も、釜石町には流出ぬ工夫がしてある。三井が東京の本部から送る、使傭人全部の生活必需品の販賣に依つて、現金的に拂つた給金が舞ひ戻る仕掛けである。

一口に釜石鑛業所を、釜石本位に評すれば、三井が東京から工場丈釜石に置いてをる型である。釜石からいへば、實際社會的生活の道は全然別である。けれども町としての政治的生活の上からいへば大變な關係で、一本道を釜石は鑛業所の力で曳きずられてをる状態に取れる。

税金關係、教育費關係、並に衛生關係などいふ點から、町と鑛業所との關係は深

い。若し多數の勞働者を本位としての警察關係など考へに入れて來れば、その關係の深さはまた一層である。

かうして見れば、鑛業所は専ら三井の東京本部に頭を持つてはをるものゝ、釜石町と社會を別とする譯には行かぬ。

元來日本の工場組織は、以前から社會とは別個に考へられてあつた。日本の工場は專制的で、一口にいへば社會的治外法權の姿であつた。その癖がまだ容易に抜けぬ。弱肉強食といふのは酷評であるかも知れぬが、強者の横暴は通りものである。

鑛業所はその使傭人の住宅を一區劃の範圍に纏めてをる。さうして、勞働者階級も役員階級も一緒にしてその子供を鑛業所直屬の小學校に入れてをる。釜石町はそれだけの教育費が助けられてある勘定である。

所がその小學校を實地視察して見れば何うかといふに、一見して直覺した印象は俗にいふ貧民學校である。尤も勞働者の住む長屋式の住宅を見れば、貧民長屋式で



ある。表面の形は、それ故に兩者釣合が取れてをる。

さてその學校の當事者と親しく話を交へて得た所では、特殊小學校といふものは普通の小學校みたやうな式の校長では駄目だといふ結論に達した。それといふのはその特殊小學校を支配する人間が、工場の中の使傭人格であるからである。隨て、金本位に切り詰め主義を取る。人間の個性も何も彼も、金で一把一括りに括つてしまふ行方である。

その學校でかういふ話が出た。縣下に今一つ資本家の立てた特殊小學校がある。それは小岩井農場の使用人の子供を收容してをる小學校である。この小學校の生徒は縣下の模範生徒の評がある。それで教育當事者は、動物方面よりかも、その小學校教育の方面目的に、小岩井農場を視察する。

小岩井農場といへば、最初は違つた經營者であつたが、明治三十年頃から、今の岩崎久彌男爵個人の經營に移つた。今日では男爵は小岩井農場を、理想の別荘視し

てをられる觀がある。一口にいへば、個人的趣味の目的物として、その農場は經營されてをる。

農場の仕事を見れば、牛と馬とが主で、種牛種馬の飼養繁殖が、仕事の目的と聞く。男爵個人は、「人間は自分の力に負へぬから、牛馬相手に改良の道を開く。牛馬なら何とか行くかも知れぬ。」といった調子で方針を定めてをられる。

その農場の使傭人の子供を收容する、農場内の特殊小學校が、縣下での模範生徒を出すといふのは、自然の妙理といひ得られやう。徳禽獸に及べば、人間は手を拱して優秀に向ふのであらう。

## 第十節 産業社會の教育機關

日本を歩いて、各町村に脚を入れ、一番目立つ建物はと見れば小學校舎である。日本は教育國たる觀念が直ぐに起る。さうしてその小學校維持のために、村では何



うしもて、平均村費の五六割を要し、町では四割内外を要する。

その小學校は、普通、縣の役人の支配を受けて、名は國民としての義務教育主眼である。隨て一種の專制氣分を有つた特殊小學であることが、自由本位の社會から見れば、争への觀察である。

日本の專制本位の建物は、役所でも、寺院でも、社會と離れた位置を占める。學校も亦その通りである。有形的な建物ばかりでなく、その内容に活きる人間の氣分まで、社會とは没交渉といった式に出來てをる。

さうした型に箝つてをる人間の氣分は、專制的な、温味の薄い、人間味に乏しい印象を、周圍に與へるのは止むを得まい。

小學校の先生は生徒に取つて一番怖ろしい。恐怖を對手に抱かせて、對手を拘束指導して行くのが、專制的政治の常道である。日本は明治大正を経て昭和の今日に至つても、幕府時代の脅威本位の政府の態度は失せやらず、社會人心に恐怖を抱か

せて、治道の要諦と心得る風が、指導當事者には抜けぬ。

さういふ風の學校に教育を受くる男女の兒童が、何うしてあの柔かい個性の自然を硬められずすむ筈はない。兒童の個性は、温い慈母の真情に依つて、自由な發達を遂げる。小學校の專制的な型に箝つた先生達は、自分等の位置と職務とには忠實であらうが、その忠實さは、形式的奴隸の忠實さである。

純な兒童の自然の個性に、形式的奴隸の忠實が、正當な指導の任務を果たし得やう道理はない。兒童の自然は、その奴隸的忠實のために、悪化されてしまうのは必然である。

日本が民族として、その奪はれたる自由を回復し、産業的社會の實を擧げやうとすれば、先づ日本現在の小學校の教育の組織内容を收むる必要がある。

その要點は、第一に行政官吏の支配から、小學校を解放する必要を認むる。第二に小學校を生活本位に社會組織に織込む必要がある。第三に小學校を兒童本位の中



樞に限らず、社會本位の中樞化す必要がある。

第一の行政官吏の支配から小學校を解放して、その後を何う始末するかといへば別に國民的義務教育の中樞機關を、行政機關から分離して組織し、それを直接國民的慈母の愛下に置くのである。國民的慈母とは、日本民族の血の中心を意味する。

第二に小學校を生活本位に社會組織に織込む意味は、校舎の利用、並に教員の職務を、社會生活本位に延長するのである。現在の日本は農村が勝つてをる。その農村社會の現状は、生産問題よりは消費問題に壓迫脅威が多い。その苦境から脱するには、消費組合の働に依るより外に道はあるまい。所がその道を求めんとして、農村社會に不動の中心となるべき機關が見出せぬ。小學校をその中心機關に適用せうとするのが、この趣旨である。

第三の小學校を兒童本位の中樞より社會本位の中樞へ延長する必要は社會生活組織の中に現在日本は中樞たるべき何も持たぬからだ。專制治下には外からの拘

束羈絆で、奴隸式に括られて、社會の秩序が保て、行く。併しそれでは社會の活動の自由は愚、社會生活の組織的進化もなければ、産業の發達を促す、人智の進歩啓發も望まれぬ。産業社會の自由を旨として立つ以上は、一貫した社會組織の不動の中心を要求する。それを小學校の組織的教育機關に求めたいといふ意味である。

日本は頭本位で足は留守。そのために頭熱足寒の不自然な變態生理状態を醸す。高等教育には高い給料の教授を雇ふ。その癖小學校の校長には低給な給料しか與へぬ。尤もそれだけの値打しかないやうな組織であるといふのが間違である。

高等教育は、學生に頭寒足熱の自然の常態を與へて置けば、獨り手に修められる。日本は教育までが逆である。

又近頃では青年の思想云々と騒いで、官吏の手で、學生の思想にまで干渉し始めた。學生の思想問題は、迷へる個性の問題である。個性の迷は何が根本原因かといへば、小學兒童を指導する人間の專制的氣分である。



日本の小學兒童は、自然の自由な光明に、赤裸々に浴させられてをらぬ。民族の慈母の通過にも型に填め込まれて、長い時間寒風に晒らされるやうな事實がある。何所に温い慈母の情が感せられやう。

青年學生は男女共に、その小學兒童の延長である。心に受けた兒童の心の印象は、喩えにいふ小蛇の受けた傷同様、成長に連れ、大きくなる。兒童の心に與へる傷の責任は、一體今の教育機關で、誰に歸すべきか、分つてゐるに相違ない。日本の國民的義務教育機關の組織は、行政官の文部大臣の支配から解放して、新たな組織の下に、民族の中心たる國母の慈愛の支配の下に移すのが、最も安全にして且つ民族將來の幸福の本であらう。

## 第八章 産業的國家の特徴

### 第一節 平民的君主

明治維新の日本の産物は表面非常に多い。さうしてその産物の特色は、悉く形に囚はれた國民的自己破壊の働を有つ。その反對に、日本が明治維新の言はゞ副産物として、裏面に生じた或るものがある。寧ろ之は無形の潜勢力といひ得やう。

若し日本に國民的自己破壊の結果、日本の落着く將來について、注意を拂ふ人があらば、その人はこの無形の潜勢力を見通しはすまい。恐らく之が、形に囚はれて自己破壊が行はれる日本の中で、形式的に破壊されぬ無形の自己を發見さす有力な力であると考へられやう。

東北には明治維新の表面の産物は見られぬ。併し又東北ほど隠れた裏面の無形の潜勢力の見出せる場所は少ない。



今日の山形縣の鶴岡市は、昔有名な出羽の庄内藩の城下である。この鶴岡市には地方銀行の第六十七銀行がある。舊藩主の酒井家を言はず中心にして、舊藩士その他が取巻いて立てゝをる銀行である。

その銀行は、勿論位置は市の目抜の場所にある譯であるが、建物は一見して、何か昔の古家を使つてをる觀がある。銀行としては珍らしい建物である。

その銀行の内に入つて、應接室に通つて見れば、そこには西郷南洲の肖像が掛かつてをる。銀行に西郷南洲、とは又如何なる對象かと疑はれやう。之亦珍らしい。

見様に依れば、鶴岡市の六十七銀行は、變物の寄集りと取れる。建物や應接室の額が變つてをるばかりでない。その銀行の人間からが變つてをる。

銀行の人間はといへば、一口に言へば物を支配してゐて、物に囚はれぬといつた型である。服装でも質素で、取りつきの悪さうに見えて、なか／＼固くて實意がある。

一例を挙げれば、その銀行の頭取だ。その頭取は歴々たる舊藩士中の所謂御家祿派の一人である。この頭取に出合つて見れば、前齒が何うしたのが、幾んど皆無い。物言ふ度に、聲が抜ける。この節の東北は男も女も金齒を入れて、テカ／＼流行の全盛なのに頭取入齒を使つてをらぬ。別段それは何も感心の種子とはならぬ。けれども物に囚はれ、形に囚はれて、自己破壊の盛んな日本の今日に於て、何ものか無形に自己を守る固い力の存することを思はず點が感心である。

その鶴岡で、ハ、アこゝには確にあの力が潜んでをるなど痛切に感じられた。あの方とは、形式的自己破壊に打勝つ方の意味である。

鶴岡市外に松ヶ岡開墾場といふ、酒井家舊藩士の一團の事業がある。こゝの集會所にも南洲の肖像が見える。聞けば南洲と鶴岡とは深い因縁がある。戊辰の際、薩軍が南洲の指揮の下に、庄内に向つた時からのことである。

西郷南洲は、鹿兒島に墓はあるが、靈は遠く離れて東北の鶴岡にあるやうに想像



される。さうしてその鶴岡で、南洲の靈は、深く物固い人間の心の底に、復活してをるかの感じがする。

鶴岡の舊藩士は、一團となつて、明治維新後、兩刀を棄て、鋤鍬を取り、算盤を手にし、天秤棒を擔ぎ、さうして民間に生活の新たな道を求めた。一口に言へば専制から自由へ、武事から産業へ急轉した姿である。

さうして、その一團は結束して、正義を標榜して、敢て政府の祿を喰まず、社會に働いて、喰つて、君を堯舜にすると誓つてをる。如何にもその誓は尊い。自由を主とし、産業を立國の基とすれば、君を堯舜にすることは絶対に必要である。

古の堯舜は自から耕した平民的君主である。その堯舜を今日に活かすのは、矢張南洲を鋤鍬取る百姓の心に活かすと同一軌である。

昔でいへば、鶴岡城市の港町といふ型で、庄内の米の移出に役立つ酒田港が、今日では尙ほ昔の面影を保つて、米券倉庫の棟を列ねてをる。

時代を更へて、倉庫の名稱も位置も變つてをる。而已ならず、倉庫の管理から支配、又はその事業の主たる目的までも變つてをる。以前は酒田の本間家の事業であつた。それが酒井家舊藩士一團の事業に移された。本間家の特殊の意思だといふ。その事業の目的はといへば、庄内地方の産米に、その米券倉庫を中心として、改良の道を開き、米の聲價を維持増進して、地方の一般生活の安定幸福を計るといふにある。

それには、事業に當る人間に、その人を得る必要がある。その人に、酒井家の舊藩士の一團が當つた譯である。それ故に、見様に依れば、この米券倉庫事業は、その確實なる性質を以て、舊藩士一團の生活に後顧の患なからしむるものとも取れる。

明治維新の打撃で生れた、新たな山形縣下の庄内地方は、酒田を霸道の町と見れば、鶴岡は王道の市に取れる。本間家の實力あつての酒井家である。又酒井家の徳望あつての、本間家の實力である。王道と霸道、霸道と王道、無の實在の眞と、有



の實在の眞との、所謂絶對の相對の調和が、産業組織の靈肉一致の本と取れる。

この小さな、産米百萬石、移出米六十萬石の世帯に活きる舊庄内藩三郡の天地は士道を基礎として立つ、日本の産業的國家の偶意ある試験場の觀がある。思へば日本の明治維新が、徳川幕府東北の重鎮の跡に、人知れず、この尊い試験所を留めたのは、或る深い自然の意にでも本づいてをるやうな感じがする。

## 第二節 産業的覇道の雛型

舊庄内藩の隠れた勢力の精神が、君を堯舜にする覺悟は、産業的國家の組織に於て、初めて實現し得らるゝ性質である。

堯舜は無産の帝王である。民に衣食足つて禮節行はれて、初めて無産の帝王が望み得らるゝ。日本の古の仁徳帝は、堯舜の面影を偲ばせる。帝王は無産で自由でありたい。それが國家の絶對な理想である。でなければ、國家主權の絶對も、又君主

の神聖も、有名無實、極端にいへば、自己欺瞞である。自から欺くものに、人を服する力は絶對に無い。

今日の世界を見れば、國家の君主多くは自廢して、組織を共和に移してをる。その根本の原因はといへば、自己欺瞞の反動として、國民に對して專制的態度を取るの止むなきに至つたからである。さらば何故國家の君主が、自己欺瞞の愚を演じたのかといへば、物に囚はれて、覇道を踏むの愚に陥つたためである。

國家の君主は絶對にして神聖なるが理想である。その絶對と神聖とは、附焼及では價值はない。自然の眞に本づく、君主の絶對と神聖とは、物に囚はれては成立たぬ。

それでは實際の國家に於て、無産の君主が、何うして安全にその位置が保て、その生活が續けられて行くべき道理があらうか。かういふ理論が起るであらう。その論者は言ふまでもなく、個人主義の奴隷である。



國家の君主が世界に於て、最近十年足らずの間に、自廢して姿を消してしまつたのは、國家の君主の理想を忘れ、形式的にその理想の型を踏んで、王道から霸道へ落ちたためである。個人主義の祟だ。國家の理想の君主は個人主義では活きられぬ。

國家の君主は、一人の君主ではない。君主は國民全體の君主である。國民全體が一人の君主である。隨て君主に個人主義は絶対に成立たぬ。

所が、從來の國家の君主は、その財産を本位として明かに個人主義に生きて來た。その祟が歐洲の國家の君主に禍したのである。

明治維新の反動で、言はず神意に依つて造り出されたかの感ある舊出羽の庄内藩は、日本に新たな理想の君主を見出させる試験場の觀がある。

土地の舊藩士の一團は、維新以來、無祿無位無官、さうしてその中心に舊藩主を抱擁して、君を堯舜になす覺悟を維持してをる。勿論君は酒井家の主ではない。その君は國民の立場から見た、國家の君主を指してをる。その君主は一人の君主にあ

らず、國民全體の君主である。個人主義の奴隷でなく、共同の生命の中心である。

かゝる共同の尊い生命の中心を安全に保護して行くために、別に一つの鞏固な基礎の霸道を見出す。庄内ではその霸道の中心は本間家である。

本間家は大地主である。土地の外には何物も持たぬといふ行方が本間家の特色である。その代り又、土地は一寸でも、子供にも分與せぬ家憲を守つてをる。本間家の家憲から推せば、土地は自分の物で、自分のものでない精神である。その土地は大切に守るべき土地として、自分が持つ丈けである。かういふ主義である。

本間家は決して歴代金には執着せぬ。維新の際には金は幾んど無かつたといふ。けれども土地には執着してをる。それは決して自分のためでなく、土地のためである。

本間家の下には小作問題は無いといふ。小作問題ばかりでない。本間家の上の藩主や藩士の問題も起らぬ。それといふのは、本間家が霸道の中堅となつて、酒井家



舊藩士一團に王道の理想を行はせて行くからである。その後方の實力は一寸の地も子供にまで分與せぬ、統一された土地の力である。

本間家の土地の力は、確に産業的國家の霸道の雛型と取れる。この土地の力に依つて、王道を守る國家の君主を助けて行く。君主は無産の帝王として、絶對自由な立場に立ち、神聖の眞に安全に活きることが出来る。

思ふてこゝに至れば、鎖國當時の徳川幕府と、京都の御所とは、この關係に結ばれさうなものであつた。併し當時はまだ日本が全體として、周圍の刺戟に乏しく、國民全體として、自己を見出す機會もなく、内部の統一そのものが、自由本位の力でなくて、專制的拘束唯一つで押通してゐた時代であつた。そのために弱者は強者に差別的壓迫を受けてゐた。強弱相寄つて、有無相通じて一團の働を示す場合に至らなかつた。今日は最早時代が違ひ、人間の思想が違ふ。

所で一つこゝに日本が國民の立場に於て大なる反省を要する點は、日本の皇室を

半ば舊幕徳川の霸道に引込んだことである。若し之を過とすれば、その過は薩長の政府に歸す。併し當時の勢、止むを得なかつたのであらう。

要するに、一旦踏み込んだ霸道は去る譯には行かぬ。そこで、過は過のまゝ、之を公にして運用して行くことが、策の良なるものである。それには皇室の一半は王道へ返り、一半は霸道に留まつて、その霸道を徹底的に社會化して、日本の土地を國有化し、王道の後方保護の力となすが、産業的國家としての策の得たるものであらう。

### 第三節 産業的國家の龜鑑

米澤といへば、絹織物の名所だ。その織物は國用向である。その發達の歴史からが、貴族的で、さうして、その産業の本質が、自己延長でない。

米澤は三十萬石の格式で、十五萬石の實高しかなかつたといふ、極々窮した生活



の舊米澤藩の跡である。舊米澤藩は、鷹山公といふ、君主の模範とも稱された名君の下に、藩政を根本的に改めて、絶對な消極主義を取り、産業方面に士民の力を傾注した。

根が消極主義であつた所から、産業組織の上にも亦その消極主義は附纏ふてゐた。藩令として、士民共に絹物は着てはならぬ、と命令して置いて、絹絲を造れ、絹物を織れ、かういつて又盛に命令する如く叫んだ。米澤藩は、人間を標準として考へて見れば、自己欺瞞を免れぬ。米澤の士民も人間である。人間に着てはならぬと命令する絹物を造れ織れと言つて叫ぶ。今日の自由を重んずる社會からいへば、確に奴隸を米澤は造つてゐた。

あの名君、自から堯舜を模範としてゐた程の鷹山公でも、時代と慣習との環境に支配されて、物を本位に人間を奴隸視した跡が見える。必要の産であらう。

今日米澤を實地について視察すれば、歐洲大戰の經濟的津浪の反動で、目も當て

られぬ慘境に陥つてをる。

米澤の織物は、年額千五百萬圓は保障される。盛時には二千萬圓以上に達してゐた。それが今では七百萬圓台に落ちてをる。地方の銀行はその影響で破綻し、屈指の株式組織の買次問屋も破産し、機屋は行詰り、織工は職を失ふて、夫婦離れて、夫は東へ妻は西へ、慣れぬ土方や女工の群に入つて、働く始末である。

米澤はそのために、從來個人主義で固めて來た織物機業を、俄に改めて、産業組合の共同主義に直して行かうとする。

勿論、その行爲が、純然たる背に腹は替られぬ立場から來た、自發的な共同主義であるかといへば、それは何人も保障の限りでないことを裏書する。

米澤の織物同業組合が主となつて、新たに機業家の一團から成る産業組合を組織するのは全く一つの敵本主義である。不純な意思がその間に存在する。その組合團體の將來は豫想に難くないものがある。それといふのは、舊來の消極的な個人主義



の支配の下に、物質的な奴隷根性の祟あるがためである。

積極的な自己を本位とした、さうして物に囚はれずに、生命の自己延長を發揮する、眞の産業的社會の自由精神は、まだく米澤には見出せぬ。

元來、米澤の今回の打撃は、何が主たる原因かといへば、自己の本體を失ふた、めである。米澤織物の本體は貴族的である。今日でも米澤の機屋に行つて、一目見れば明かに分るやうに、その織物の製造からが、全く趣味本位な差別的性質を有つてゐる。その一點が何よりも強い貴族的な本色である。

その本色を有ちながら、大戦當時の景氣に煽られて、米澤はその織物を労働者階級の趣味に投じ出した。労働者階級の趣味に米澤織を投せさすことが、決して非難的ではない。非難的は他にある。

若し米澤がその織物の本體を延長して、貴族的なりに、労働者階級へも向けたとすれば、何の非難も又禍の種子も知らぬ。けれども米澤はその織物の質を悪化した。

原料の絹絲に土まで附けて、重量を増したといふ事柄さへ、今は争へぬ事實である。

この米澤の行方は、自己を失ふて、誤れる道のデモクラシーに踏み込んだといひ得る。物に囚はれた個人主義の祟である。

兎に角、米澤といふ、あの山間の昔の藩に、何うして一市の産業として、千四五百萬圓に値する絹織物が、纏つて出来る基礎が生じたかといふ事柄は、縦令今日如何なる事情が内部にあらうとも、調査考究の價値あるは争へぬ。

米澤藩は、その財政の急と、藩士の貧乏を救助する一念を以て、米澤織の基礎を立てた。資金は藩金であつたといふ點が、この基礎を立てるについて最も大切な事柄であつたと取れる。それに次いで、製品の品質向上、販賣の共同統一、といった事柄は普通の通りに重要視された。

この米澤の本來の行方は、消極的な行方の中にあつて、個人主義を排して、共同主義に出たことは確である。併しながら、時勢のために、専制を脱せず、自由な自



己中心の立場から、自發的に共同一致團結の道を取つた跡はない。藩の行方は、矢張、專制的國家の個人主義の色彩を濃厚に有つ。それが米澤今日の行詰りの根本である。

産業的國家が、社會に自治的に行はせうとする産業組合なるもの、本質は、個人主義の專制とは兩立せぬ。けれどもそれは個人主義の自由とは兩立する。兩立するといふよりは、寧ろ産業組合なるものは、個人主義的自由を基礎に成立たねばならぬ性質のものである。

#### 第四節 同業組合の本質

米澤が今度新たに、その市民の死活的織物業を業産組合の組織として、縣を通して中央から、約三十萬圓台の資金を低利に借入れて、一般市内の機業家の窮境を救ふ道を出したのは、市の織物同業組合の頭であつた。

米澤市の織物同業組合は、その建物を一見した丈けでも、有力なもの、やうに取れる。けれども、何所までもそれは同業組合たる本質を失はずに示してをる。

一體同業組合は、個人本位の攻守同盟で、その本質は同性結合である。喩えていへば、昔の宗教が、坊さん尼さんの差別をつけて、男と女と別々に同性結合主義を取つた型である。同業組合の本質は、根が專制的な個人本位の攻守同盟たるは争へぬ。随つて、産業組織といふやうな、生産本位の立場から見れば、不自然、不合理であるのは分り切つてをる。

同業組合組織は、商賣人仲間には、左まで不自然でも不合理でもない。生産は全然目的でなく、金の利鞘が目的で、一枚の毛布を引張り合ふのが仕事であるからだ。根が空なお札を使つて、働く人間の血を吸ふ目的には、同業組合は適してをる。その起りが、力本位の喰合ひに等しい戰國の攻守同盟にあるからだ。

米澤の織物同業組合を見るのに、その組合の中には、絲屋、色揚屋、機屋、整理



屋、いろ／＼な分業がある。さうしてそれらの分業は各個に獨立した個人主義の組織に本づいて成立つてをる。

それだから、糸から織物が織出されて、チャンと市場へ向けらるゝ商品となる迄には、幾つかの違つた關所を通らねばならぬ。その關所を通るのが、果して自由でそして無税ですむかといへば、その間の秘密は局外者には分らぬ。

誰だつて、今日明白な事實となつてをる、原料生絲に土を粘り込んだ仕掛けなど公に局外者に知らす筈はあるまい。併しそれは何所かの關所で行はれた仕事であつて、確かな一種の重い關税として、織物の上から取られる理である。

殊に又、織物全體の同業組合が成立つやうに、その分業間で、絲屋は絲屋、色揚屋は色揚屋、機屋は機屋、さういつた同業者が、同業組合を組織して、攻守同盟を造り得る。その場合、それらの攻守同盟の對手となる當面の敵はといへば、同じ織物同業組合内の與黨であらねばならぬ場合が生じて來やう。織物同業組合を本位に

考へて來れば、自分の體の肉を喰はれる話になる。産業社會の組合組織としては、同業組合は何うしても理に合はぬ。一口にいへば、目的を一つにしてをる同士の間で、互に肉の食ひ合をして、責任轉嫁、互に自分丈けがいゝ子がつてをる行方が、米澤式の同業組合には附物である。

この同業組合は、マキアヴェリ式の舊式思想の國家をつくりである。弱いものが一團となつて、周圍の刺戟に應戰する。その一團の中にある、小さな團體が、又その通りの性質を有つて、周圍の刺戟に應戰して行く。悉く嘘のつき合ひ、保護色の發揮し合ひである。

今日米澤が、山間の一市として演じてをる、織物同業組合の現象は、そのまゝ移して、日本の國家全體の上に適合して差支ない。

その中で最も著しい例はといへば、資本家階級の同業組合と勞働者階級の同業組合との間である。世の中では勞資協調などと騒いである。さうして資本家側代表は



常に商業會議所といふ、一種の資本家同業組合から選出して誤まらぬ。所が労働者側代表は、まだその組合が法律上認められてをらぬといった状態で、選出にも暗に手心が要る譯であらう。

商業會議所といふ、資本家の同業組合は、明かに攻守同盟の性質を有つ。併しその中には又幾多の相喰ひ攻守同盟が、陽に陰に存在してをる。商業會議所に何の權威なく、又その存在の必要の疑はれつゝあるのは知れ切つてをる道理である。根が不自然な同性結合であるが故に、同性を出し抜いて、異性の臭をかぎにこつそり出掛けるのは、昔の坊主と尼さんとの間の事情が物語つて呉れる。

労働者階級の組合だといつても、同業組合の本質から除外されぬ。若し産業を本位として、資本が優位の男性に比せられ、労働が劣位の女性に比せられるならば、労働組合は、昔の尼寺式である。

兎に角産業組織が、昔ながらの専制で支配されてある間は、攻守同盟式の問題は

去らぬ。隨て階級闘争意識などいふ、新らしい名を附けて、その間で、陰に坊主の種子を宿す、尼のやうな笑止な恰好に成行く組合がないとはいひ得ぬ。

以上の如き産業界の現状は、その本を質して行けば、皆専制本位の舊式思想の國家に歸する。舊式思想の國家が、その權威を維持するために、同性結合の團體組織を造らせて、さうして製造して行く廻燈籠の現象が、即ち産業界の現状であるのだ。同業組合はその舊式國家の奴隷である。産業界には、ルーテル、若くは親鸞が生れ出ねばならぬ。

## 第五節 國家の求むる産業組合

舊式思想の國家は、不合理不自然の道に依つて、自滅の運に遭遇することを免がれぬ。その愚は、國家が正義を無視し、自由を滅却して、人類に自然の本能的愛の至情を發揮する道を破壊するからである。



國家はそれを悟つた。國家が國民に産業組合を奨励しつゝある理由は、國家の自覺の裏書である。

世界を見れば、國家といふ國家の姿は、君主國から共和國に變化して行く。專制から自由への變化である。男が女に化す姿である。右の不自然から左の不自然へ、白の不合理から赤の不合理への轉化である。若し國家が時計の振子でもあるならば、その左右の不自然な位置も認められやう。又若し國家が線路の信號機でもあるならば白赤の色の變化も許されやう。併し國家は絕對にして神聖を理想とする。國家自から自己欺瞞の行爲や、保護色發揮や、自から自己の鼎の輕重を示すが如き行動は、絕對に避けねばならぬが當然である。國家の自滅の根本原因は他にある。決して君主國なるがためでもなければ、又共和國ならざるがためでもない。國家自滅の根本原因は、不自然な道を迎るためである。

神にあらざる人間が、神の道を迎らうとするのは不自然だ。男女異性の結合にあらねば、生命の自己延長は不可能なのに、男女を離隔して、生命の自己延長の働を男女に強ひるは不合理である。昔の宗教が、坊主や尼に求めた靈の働は、決して形式的表現ではなくて、生命の延長の働であつたのだ。自然の眞の働は、同性結合の組織では出來ぬ。異性結合の組織に依つて初めてその働は求められる。

國家が自己の運命に自反して、國民に求むる産業組合組織なるものは、即ちその意味の異性結合組織である。

所が國民はそれを理解せぬ。日本を歩いて、何所の産業組合組織を見ても、その成績が好く行かぬ。例へば東北に最近各縣少なからぬ奨励金など出して造らせてを、蕪市場や、乾蕪倉庫の模様を目撃してみても、その成績は極めて寒心に堪へぬ。岩手縣では蕪市場を産業組合に依らずして、株式會社に造らせて、さうして縣が奨励金を出してをる。變態的な行方であらうが、實際に鑑みた行方であらう。單に人民に自覺を促がし、理解を求めてみたからとて、促がす當人求むる側の本人が



眞に産業組合の眞人でないのが、過の如何ともしがたい點である。

若し日本の國家が、國民に眞に産業組合の自然の道を辿らせやうとするならば、國家自からその自然の道に還ることを必要とする。現在國家は尙ほ自身依然として舊態に留まつてをるではないか。自からを延長せずして、他に變化を求めても、他は容易に變化するものではない。國民は國家そのもの、肉であり靈である。

さらば國家が、自から進んで、産業組合の自然の眞理を國民の血に植ゑ込まうとするには、如何なる道を取るべきかといへば、國家は自己從來の男性的統一の態度を失はず、それと絶對的相對の位置を守るべき女性的統一の態度を取る、或者を造り出すのである。

國家は絶對にして神聖なる權力を有し、欲して爲し得ざる所なき能力を持つ。その權力と能力とを以て、産業的覇府を開く。さうして、その覇府に一切の物質的內助の働を分つのである。

かくして、日本國民を本位として、靈と肉との一致の行動、若くは國民的生命の自己延長を本位として、男女異性の結合的行動、それらの行動が完全に期し得らる。國家が自然に還るはこの道に依るのである。

日本は七百年來の幕府の歴史に鑑みて、この道は踏襲し得るに難くはない。日本の七百年の努力の結果は、決して偶然でないことを忘れてはならぬ。親を恨み、親を棄つるは子の不孝といふ。日本の國家は、七百年の歴史を棄て、國民に孝道を強ひる資格は絶對にない。

新たな元號は共和の眞意を有つ昭和といふ。國家が國民に求めつゝある産業組合の眞精神は、正に共和の精神である。若し日本が國家をその精神に依つて導くといふならば、日本の祖神はその愚を一笑に附して神軍の力を喚起するであらう。けれども、國家が内助の力とする物質本位の覇府に對して、共和の政治を取らるのは祖神の喜びを招くとしか考へられぬ。



産業組合の真意を、國家的に國民に徹底さす道は唯この外にはあるまいと思ふ。さうして又國家が國家自身の立場を、不自然から自然の道に返し、その存在の安定を計る道も、この外はあるまいと思ふ。國家は國民に先つて、周圍の環境の變化に鑑み、自から之に處し、國民を守る自覺がなくてはならぬ。

## 第六節 株式會社

立憲的國家組織の中に、恰度國家の分裂した細胞のやうな形をしてをる、立憲的小國家がある。之は以前專制的な個人主義の國家の君主から、所謂有産階級が、神軍の力に依つて、獲得した生存權の自由の産である。一般實業方面の社會に、株式會社と稱する組織は、その小國家の組織と見て可い。

株式會社は、その本質は自由である。けれどもその主義は個人本位である。會社の株券そのものが、物を言ふ權利の主體となつてをる。一株が一口といふのは蓋し

偶然ではない。隨て株式會社は、物を標準として一口の權利が定められる。株が主で、人は主でない。

株式會社が立憲的小國家の型に嵌まつて、物が主で人が主でない原因は、その小國家が有産階級の個人の自由に本づくからである。

元來政權に活きた昔の專制君主は、力が主であつた。若し物を本位に考へるならば、專制君主は無産階級の一人である。專制君主は力を主として有産階級から物を取つた。課税はその搾取に過ぎぬ。有産階級が神軍の力で、この搾取から遁れたのが、今日の實業社會の自由の行動である。

それでは實業社會に、有産階級が如何なる智慧を絞つて、その生存の自由を維持する道を出したかといへば、何も案出する智慧はなかつた。彼等は物に囚はれてその物に生きる世界をのみ考へてゐた。それで彼等は、以前の君主が通つた道の型を取つて、力に物を置き替へて、自分等の實業社會を造り出した。之が有産階級の



個人的自由を本位とした立憲的國家の中の小國家である。株式會社はその小國家の代表的組織といひ得る。

日本の例に就いて見れば、徳川幕府の封建の諸大名は、悉く個人主義の専制君主式で、力本位に生きてゐた。封建が瓦解して、明治維新を造り上げた日本は、恰度迷兒のやうに、行くべき道を知らなかつた。

それで西洋の型に入つて、知らぬ道を、西洋人の手にすがつて歩き出した。何うして西洋の型が日本人に分らなかつたといへば、實業界の西洋の社會は、有産階級が神軍の力に依つて、専制君主から得た、自由の天地である。それが日本人の眼には不思議で分らぬ。

日本の封建の瓦解は、専制君主自からの廢業であつた。喩えていへば、今日の公娼が、樓主の自覺に依つて貸座敷廢業の下に、解放され、自由を知らずに、世の中に迷ふやうに、日本の有産階級もその他の階級も、解放された奴隸の境遇を、何う

處置して可いやら分らなかつた。

けれども、本は同じい。専制的な個人主義の君主の下に、力本位に物を搾取されてゐた境遇は、東西古今同一軌である。それで日本の有産階級が、自由は知らずに迷兒の型で、西洋式の道に入つてみれば、直ぐに勝手は分つて來た。勝手が分つて來てみれば、その式の都合の好き加減が又逆も話にならぬ程である。

西洋では有産階級自から、神軍の力で、尊い血を犠牲として、失はれた生命の自由を回復して、造り出した實業の天地を、日本の有産階級は、まるで夢のやうに手に入れた譯だ。

日本の有産階級は、アラビヤン・ナイトのアラチンのランプの魔法式に、一夜造りの手合が多い。さうしてそれらの手合が、まるで蜂須賀小六式の頭を以て、力に物を置き替へて、自由の天地で活動し始めた。

日本の株式會社の性質は、西洋の型通り、個人主義で、物本位で、一株一口式で



ある。けれどもその型が同じばかりで、本質の自由は日本の株式會社組織の個人の生命には見出せぬ。日本人の血は、專制の遺傳に充ちてをる。

事實に徴してみれば、論より證據、よく分るであらう。實際日本には、會社ゴロ、會社喰、會社泥棒、いろ／＼な人間が、株式會社當て込みに棲息して廻つてをる。何がかやうな有害な種類の人間を製造し出すかといへば、それは專制的個人主義である。專制的個人主義は無形な力本位である。神權といひ、主權といひ、政權といひ、法權といひ、皆無形の力である。今日の會社ゴロ、會社喰、會社泥棒の種類を見れば、皆個人本位の無形の力の濫用である。種子なしには偶然には物は生せぬ。この日本現在の株式會社なるものは、よく日本の國家の本質を曝露してゐやう。日本には從來、國家ゴロ、國家喰、國家泥棒の言葉はなかつた。併しながら、人間の眼は、餘り小さな物は見えぬやうに、餘り大きなものも亦見えぬ。國家といふ物は、その實人間の眼には餘り大き過ぎて映らぬのである。

國家に潜んで、神權を弄し、主權を恣にする輩は、ゴロ、喰、泥棒の類であつても、株券、人權を恣にする輩に較ぶれば、文字通り、雲泥の差である。露西亞の一例は明かにその活きた證據である。如何なる力が國家ゴロ、國家喰、國家泥棒を調するのかわいへば、之亦無形のより大なる專制的神權若くは主權であるのであらう。專制は何所まで行つても專制の犠牲である。現代の國家は明かに一つの大きな物本位の會社である。

### 第七節 産業的小國家の分化

有産階級の資本主義の會社組織が、内容の自由主義を、外部へ向つて、專制的に發揮したのが、現在物質本位な社會主義の發生を來たしてをる。

今日有産階級に對抗して、無産階級の運動を見るのは、その標準は何にあるかといへば、唯物にあるばかりである。有産階級といひ、又は無産階級といふも、物に



囚はれた奴隷たる點に於ては同一である。唯兩者の相違は、右と左、晝と夜、上と下といふ區別に過ぎぬ。全くの形式標準である。

それ故に、若し形と物とを支配する、時の環境を標準に取つて考ふれば、有産階級並に無産階級の争ふ意識は、生命没却、自由無視の専制としか取れぬ。形式的な自己表現で、生命の自己延長の働ではない。殊にそれは、形に囚はれた自己の破壊の行爲である。物の奴隷にして、生命の自由を失ふてをる。

一個の人間を本位として考ふれば、活きんがための自由は、非常の場合、活きんがための専制である。楯の両面は常に生殺兩立してをる。

今日の如き個人的本位の生存競争の世の中では、個人は常に戦闘氣分である。楯の半面に自由を求め、他の半面に専制を發揮する。生と死と、常に心の楯に付き纏ふてをるのである。

かゝる個人の心理はといへば、自由を求むる内面は、共同一致結合の働きを欲し

てゐる。さうして、その外面の専制の側はといへば、個々の分離を欲して止まぬ。

それは戰の眞理として、勝を求むる人間の心理である。

この個人の場合の心理は、そのまゝ今日の國家にも當嵌め得る。そして又それは、會社の如き法人にも當嵌まる。殊にそれは、移動の自由の比較的最も少ない、社會の産業組織體に最もよく當嵌まる心理である。

假に日本全國を標準として、國家の新たな産業方面に對する方針を一瞥すれば、個人主義の株式會社組織に反するが如き觀ある、組合組織を奨励指導してをる。その奨励指導の成績、理想實現の効果如何は別として、國家が産業的に如何なる分化の働を生じつゝあるかを示すに足る的確な一現象である。

この國家の産業組織の分化作用の動機はといへば、前に述べた個人の心理に本づいて、内部の自由を求むる國家的意思の表現である。

この國家の新たな分化作用は、專制的個人主義な唯物本位の立場を離れて、自主



自由共同主義な生命本位の立場に方向を向け更へた一證である。けれども、又國家の絶對の立場を達觀すれば、内には自由共同の生命本位の立場を要求しながら、外には尙ほ國際的立場に於て、楯の外面に等しき態度を取らねばならぬ。國家はこの意味に於て、産業方面に於ける專制的個人主義の本質を有つ、株式會社組織を無視することは絶對に出来ぬ。若しさうすれば、國家は世界の現在の經濟戰から退かねばならぬ。

かくて國家の現在の立場を直視すれば、矛盾した二面の楯の働きを演せねばならぬ道理である、それが國家の苦痛であり、現在の行詰りの根本原因である。殊にその國家の悩みは産業方面に多いのである。何うして國家はこの行詰りの境遇を展開して、矛盾した二面の楯の働を、一致し得るであらうかと、國家の産業的立場に於ける、確かな死活問題である。

日本の實際社會に於ける産業方面で、産業的に國家の死活を司る力のもは何

かといへば、米と繭とであるといひ得る。その二つについて、米に對しては國家が意を用ひる。さうして生産的方面と消費的方面との二面から、解決の道を計つてをる。米は國家の立場から見ても、全然内部の生の自由に屬してをる。隨て、地主と小作との間の問題でも、若し國家が産業的國家の立場から、個人的心理の時代の要求を透察して、それに應ずるの覺悟さへあらば、容易く解ける性質であらう。

けれども繭の方は、米とは全く趣を異にする。對手が外國の金である。この金を取るのが、現在日本の繭の唯一の目的である。國家の絶對な權力も、之には何の働も直接には無い譯である。それで國家は自分の内の産業的小國家に一任してをる姿である。

それでは實際日本の産業的小國家は、その繭に對して如何なる道を迎つてをるかといへば、全く別に智慧はない。矢張、國家の迎つてをる道を踏襲してをるに過ぎぬ。一口にいへば、時代の個人的心理に支配されてをるのである。



日本の製絲會社を組織的に代表するものは、信州の片倉製絲株式會社と、丹波の郡是製絲株式會社を擧ぐれば足りる。片倉は出發が個人であつた。郡是は株式であつた。郡是の組織は、地方本位に製絲家と養蠶家とが株主となる行方であつた。その趣意には共同的自由主義が表はれる。又片倉の方は、現在でも折節耳目に觸れるやうに、專制的な個人主義一天張の行方であつた。

所が、郡是の行方は、理想が實際に裏切られて、今日では製絲家と養蠶家との共同的な株式組織は行はれてをらぬ。普通の株式組織で、製絲會社が經營されてをる。片倉はといへば、これ亦個人主義の專制から脱して、個人主義の株式會社と化してをる。その形式は郡是と同一標準と見ることが出來て來た。

郡是も片倉も、立憲的な産業的小國家の形式である。今その産業的小國家が、繭に對して、何如なる道を辿つてをるかといふに、個人主義的株式會社の立場に立つて、共同主義的産業組合組織の下に結合する養蠶家と結合の道を辿る方針でをる。

この道は、決して單に郡是と片倉との二會社のみの事柄でなく、他の日本の大製絲家は、同じ方針でをるのである。

この産業的小國家の方針は、内に自由の結合體を本位として、外に專制の個人主義的活動を維持する行方であることが分る。大なる活動組織を標準とすれば、それが自然の成行であるのは分り切つてゐやう。相反した楯の兩面の働は、かくして矛盾のまゝ一致統一の道が見出せる。人の力といふよりは、寧ろ時の環境の支配に依る人間の心理の働といひ得やう。言ひ換ふれば必要の産である。

### 第八節 勞資問題の自然の傾向

日本を本位として考へる場合、勞働が人道上商品にあらずとの原則が實行されるば、日本人の米も亦、日本に於ては商品として考へるのが至當であらう。

日本は米作を中心として、小作問題が擡頭する場合、國家は産業的立場から、土



地の國有を斷行して、國內に自由平等主義の米作法を見出すであらう。國家としての楯の半面の内部の自由は、國民的生命の延長から、その必要を餘儀なくされる。若し勞働が、日本の立場に於て、世界の國際勞働會議の原則を、原則のまゝ維持するとした場合、その勞働を、普通、手から口への人民に、自由競争の立場に於て、市場に出させる場合には、その勞働は生繭と略ぼ等しい經濟關係を有つ。

生繭は普通養蠶家の手にありては、經濟的に所謂腐敗性の貨物である。それ故に對手の製絲家が、個人主義な專制の立場から、養蠶家に向ふ場合は、養蠶家は立つ瀬がなくて、踏み倒される悲境に陥る。その悲しい境遇を養蠶家は體驗した。

そのために、一方には養蠶家が養蠶組合を組織して、同業者組合式の攻守同盟の態度も取れば、又は組合製絲式に、自分等の繭を養蠶家自身の組合の力で消化して生絲にするといふ道をも取る。

この第二の行方は、産業組合組織で、養蠶家の立場からは、一見理想的に取れる。

さうして自由な立場で自主的な精神も發揮されるやうである。けれども何事もさう好いことばかりはない。

第一に組合製絲は、大なる經濟組織の破壊である。農の立場と工の立場と商の立場との三つの經濟的分業が、組合製絲で統一される姿であらう。その統一は、明かに半面、經濟組織の分業の破壊である。

理想として、一般生産方面に立つ弱者階級は、自分の努力の結果は自分自身支配することが、自主自由の精神に適ふやうに取る傾がある。社會に於ける強者の壓迫の反動と取れる。それは社會の人道破壊である。

貧民は自分の子を賣る。自分の努力の結果を自分自身支配する行方である。けれども、人道は如何に破壊されても、その行方を公然許す筈はない。若しそれが公然許されるれば、親が自分の子を性的に犯すやうな禽獸の生活に陥るであらう。それでも神は黙過するであらうか。自然に還るにも程があらう。



現在社會の勞働者階級は、生産を本位として、自分の努力の結果を自分自身支配せうとする理想に生きてをる。社會の共同生活が、自由平等を裏切つて、弱肉強食の獸的行動を公然許してをるからである。

勞働者階級は、生存權の自由を叫んで、先づ楯の内面の心理に本づいて、結合一致團結を計る。それは自然の行方である。次に彼等はその團結したる自由の力を以て、專制的な楯の外側の行動を起す。之も亦自然の行方だ。

その場合、資本家側は何うするかといへば、等しく個人的心理に駆られて、楯の内側の自由の結合を固め、專制的に對手に對する道を取る。その場合、資本家と勞働者とは、數の上に非常な差がある。それで兩者の楯の外側は、等しく專制的にしてみても、取る兵法に相違がある。勞働者階級側は、對手の集團に直接行動を辭せぬ。けれども資本家階級は、對手を集團的に結合さすのは、兵法上不利と見る。勞働者も資本家も、形と物とを本位にして、支配された頭の持主であるからだ。

彼等は時の環境と生命の延長の働とは度外視してをる。若し彼等が、資本家側にしろ、或は勞働者側にしろ、生産を本位としてみる場合、資本は勞働の結果の蓄積であることは、否認し得まい。資本が勞働の子孫であることは、時を標準に、生命の自己延長を考へる頭には、直ちに理解される譯であらう。その資本が勞働を壓迫して弱者の位置に陥れるのは、子が親の肉を喰む、非倫非道の行方である。

又勞働が資本を犯す行方は、非で非を攻め、親が性的に子を犯す行方に當る。道理は全然之を否認する。

單に形と物とに囚はれた勞資兩階級は、親子の肉體的差別對象を認むるのみで、親子一體の自然の眞を認むる心がない。時を標準に考ふれば、親子は即ち一體である。鶏でも、卵が親か、雞が親か、問ふのが愚であることが分るではないか。

勞資の階級的鬭争意識は、生産を本位として、全く不自然不合理非倫非道であることが明かに意識されやう。



言ふまでもなく、現在の労働問題は、小作問題とも同一に、生産方面の問題ではなく、全然消費方面の問題であることを知らねばならぬ。生産方面からは、起るべき道理がない。

消費問題の立場を考ふれば、人間の胃袋、身の丈、能力、さういふ點が、唯物本位の勞資階級の頭を支配する標準とならう。皆計量して數字で勘定出来る性質である。資本家の人間の胃袋と、労働者の人間の胃袋と、同じ人類の胃袋である以上物の容る量の差は、馬と人との胃袋みたやうではあるまい。消費問題として勞資問題を取扱ふのが、自然の道理に近寄つて來やう。

日本が國家的に内部の自由平等の意識を高め、人口問題並に食糧問題等の刺戟を内部から強められる場合には、自然に労働者非労働者階級を問はず、時を標準として、生命の自己延長を絶対主要條件として考へる必要に迫られやう。勞資問題はその場合自然に解ける。

### 第九節 國家的日本の民衆心理

日本の民衆は、糞を喰つてゐて、糞を嫌ふ。日本國中の何所の家を訪ねてみても便所のない家は一軒もない。さうしてその便所には、黄金の色の糞が溜る。その糞は、家中誰一人も手を着けぬ。

併し實際は、臺所の米でも野菜でも味噌醬油酒に至るまで、糞の肥料がかゝつてをる。その糞が日本人の腹から出て腹へ還る。その還元の自然の理が、日本にはただく附物である。

日本人の民衆的心理は、物に對する迷、形に囚はるゝ意識が強い。物の自然、形の眞に徹底する頭なくして、唯物の皮相の刺戟に動き、形の大小美醜に依つて自己を支配する。

この民衆的心理は、確に日本の大なる國家的缺陷である。國家の靈肉は、國民の



靈肉から成る。その靈肉の多量を貢献する民衆が、單純なる物と形との奴隷に等しい心理の持主では、國家組織の本質が劣悪極まるは争へぬ。

この日本の民衆的心理を、最も強くこの状態に拘束する原因は何かといへば、日本の固有の宗教の形式である。日本到る所に、佛教の寺がある。その他宗教類似の堂、種々雑多なものがある。その中でも、佛教の寺が一番多い。それが日本の民衆的心理を、物と形との奴隷化してをる。

あの偶像は黄金の色が失せかけて、釋迦か佛か何か知らぬが、まるで糞をつくりの色が見える。決して佛に對する不敬の言ではない。佛は第一、黄金の箔を張り着けるのが、不敬の極である。佛の眞は物や形以上ではないか。それを木や金に捕へて、金箔まで着せるのが、不敬である。

佛の像は糞でも差支なしとして、それに迷はされる民衆の心が捨て置けぬ。佛者はかういふ。眞は汝に出て、汝に返る。佛像の眞偽は、汝自身の眞偽である。

偶像崇拜の人間の行爲は、決して輕侮する譯には行かぬ。不信は不眞である。

この佛者の言は眞である。絶對の眞は、己の心の中より發する。さうして心そのもの、中にある佛が即ちその眞の本體であらねばならぬ。信と不信とは、その佛を己の心に有つか否かの相違である。言ひ換ふれば、一身の主を見出し、自己を發見し得たか否かに依つて、信不信が分れて來る。

日本の佛教の形式は、日本の社會生活の様式そのままである。糞を喰ふ日本の生活そのままの様式が、日本の佛教の形式である。

日本の一般民衆の家を訪へば、佛壇が屹度ある。その佛壇の中には、黄金色の消えかけた佛にちなんだ祖先の位牌がある。この位牌は家中で一番尊い。

日本の一般民衆の家では、火事といへば、まづ位牌を持出す。位牌は尊い。又親不孝の子供がをれば、親は位牌の前で子に意見をする。聞かねば位牌で打つ。位牌の力は強い。肉的でなく靈的である。